

Jazz Today®

Monthly Free Magazine

2006.11 No.31

Take
Free
from TOKYO, japan

Grace Mahya / Tiffany
Naruyoshi Kikushi et Pepe Tórrmento Azucarar
Mohicarno Seki Latin Jazz-Octet-Band
Hiroshi Minami / Kengo Nakamura





菊地成孔

あらゆる物語ジャンルを侵攻する武力を持った語り手。

Text by 富永昌敬 (映画監督)

PHOTO by 谷口京

映画以上に映画のような、菊地成孔の音楽

かつて菊地さんはぼくの映画作品について、「富永くんの映画は始めから終わりまでずっと無調のジャズが流れてるようなムードだよ」と評してくれたが、あるときぼくは、ぼく自身の「無調のジャズ」というのがほかでもない菊地成孔クインテット・ライブ・ダブの演奏であると気づいてびっくりした。なにしろ2003年11月におこなわれた

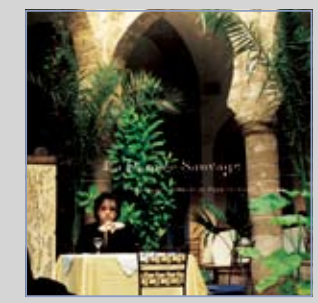
JAZZ TODAYにおけるクインテット・ライブ・ダブのデビューステージ以降3年のあいだ、続くステージのほとんどをぼくはビデオに撮影しているのだから、それらの映像を編集したり加工したりするうちにアドリブフレーズをもどろにか口ずさめるほど暗記してしまったというのはつまり、クインテット・ライブ・ダブを脳内アーカイブ化したう

え幾らでも自家再生できるということにほかならないのだから呆れたものだ。呆れたものだが、こればかりは言うまでもなく、もちろん、影響を受けている。「ムード」という点において憚りながらぼくの映画作品はあなたの影響下にあるのです、と断言しようとしたら菊地さんは、『パビリオン山椒魚』の冒頭シーンにクインテット・ライブ・ダブに

よる「無調のジャズ」をつけてくれたのだ。あっさり。「こんな感じでしょ?」と。そのときぼくが抱いたえも言われぬ強い親和感と幸福感はどなたにも分ち難いものである。

同時にまた、物語の語り手としての菊地成孔に、ぼくは師事する。勝手に、だ。こればかりは言うまでもなく、もちろん、やはり、影響を受けている。昨年夏に「REAL TOKYO / Tokyo jazz report」にも述べた持説をいまいちど重ねる無料にもこのさい躊躇しない。菊地成孔こそ現在最強の物語作家である。ようは1/60億ということか。むろんぼく(アレキサンダー)は自分がジャズ喫茶のレコード係だからといってジャズを知っている気になっているだけだが、菊地さん(ヒョードル)がジャズの百年史上もっとも積極的に虚構のありようについて考察したひとりであるというのは、もはや異論を待たないだろう。つまり20世紀におけるデューク・エリントンからチャールズ・ミンガス、そして世紀末のキップ・ハンラハントジョン・ゾーンを経た現在のどこを見まわしても、菊地成孔ほどあらゆる物語ジャンルを侵攻する武力を持った語り手はいない。つまり菊地成孔とベベ・トルメント・アスカラルの『野性の思考』とは、「植民地」に生まれた「存在しない女優」の悲嘆のため息が聴こえる、「存在しない映画」のサウンドトラックなのである。あなたの「存在しない女優」は「熱病」のさなかに目覚め、彼女の「悲劇」は「白日夢」のうちに立ちのぼる。「存在しないジャズ」は「菊地成孔」の熱病の「起源」とともに目覚め、あなたの白日夢は「野性」を「思考」を「トルメント」の「菊地」を「成孔」にのみ「存在」とはいえ問題は映画だ、問題は、映画なのである。すぐれた音楽は、時としてその姿のまま映画音楽となってしまふ。

だからぼくは映画を撮っているからといって映画のことばかり考えているわけではないけれども、いや映画とジャズと「存在する」女優さんたちのことばかり考えているのだけれども、ともすればあらゆる音楽を映画音楽へと転用してしまいがちな現代映画



野生の思考 (La Pensée Sauvage) 菊地成孔とベベ・トルメント・アスカラル EWCD-0117 (2CD) ¥3,150 (税込) 2006/10/10 RELEASE

二つの組曲とカバー曲集によるトリコロール。鬼才菊地成孔率いる、現代音楽とラテン・ラウンジを繋ぐストレンジ・オーケストラ「ベベ・トルメント・アスカラル」による「熱病」を巡る爛れた交響楽。

- ディスク:1 01. はなればなれに 映画「はなればなれ」より(監督:J.L.ゴダール) / 02. 組曲「キャバレー・タンガフリーク」1 孔雀 / 03. 組曲「キャバレー・タンガフリーク」2 生け花 / 04. 組曲「キャバレー・タンガフリーク」3 儀式 / 05. 組曲「キャバレー・タンガフリーク」4 夜の全裸 / 06. チェルシー・ブリッジ
- ディスク:2 01. 組曲「ヴィオラ・トリコロール」1 第一楽章 紫 / 02. 組曲「ヴィオラ・トリコロール」2 第二楽章 赤 / 03. 組曲「ヴィオラ・トリコロール」3 第三楽章 金 アルトサクソフォンとハーブのデュエット (菊地成孔のために) / 04. プラザ・レアル / 05. ファムファタール~妖婦

にとつて、菊地さんのディスコグラフィーはどうしようもなく垂涎の的となってしまふにちがいない。よだれを、誘うのである。ここだけの話、やたらと既成楽曲を使いたがる恐ろしい映画監督がこの世にご健在なのだから困ったものだ。ひとりはずでに亡くなっているが、もうひとりとは老いてなお精力煥発であると聞く。そんなスタンリー・キューブリック監督は鬼籍の奥底にお寝んねしているとはいえ、そんなジャン・リュック・ゴダール監督が『野性の思考』を聴いてしまったらと思うといよいよ心配になってくる。あの助平爺さんがぼくらの菊地さんに欲情しないわけがない。ぜひともスイスの湖畔とかスカッシュセンターの売店とか、ことごとくあのひとの手の届く地域では売らないようにしていただきたい。

そしてぼくは映画を撮っているからとい



The Original Sound Track 大停電の夜に EWCD-0095



南米のエリザベス・テイラー Elizabeth Taylor en Amérique du Sud EWCD-0104



オリジナルサウンドトラック パビリオン山椒魚 菊地成孔 EWCD-0127 ¥2,200 (税込) 2006/09/16 RELEASE

「結論から言うと、富永監督の最初の脚本と同じで、作り過ぎたわけ、音楽を。」(菊地成孔談) 「結論から言うと、このアルバムには作り過ぎたものすべてが、映画のプロットを無視して収録されているわけです。」(担当ディレクター談)

- 01. コンラート19take1 / 02. コンラート19take2 / 03. コンラート19take3 / 04. オメルタ / 05. 映画女優は体操服の夢を見る / 06. 夜と蟹 / 07. ストランゴレー / 08. 女子高生は橙色の列車を見ない / 09. 麗人アンナ・ベルタ / 10. Can you X-ray me? / 11. すばらしい生命の息吹 / 12. 妖婦ユスティアナ / 13. グラン・パレの日本人 / 14. モンテ・ヴェリタ / 15. 痲痺テレビ、吃音テレビ / 16. ちろろ六ほ七本木の阿片窟 / 17. トゥーリと彼自身による更新物語 / 18. イル・カメラータ / 19. ヴェンデッタ / 20. ケネスの知らない百万円 / 21. 風船騒動 / 22. ジャンプボール幻想 / 23. KEEP IT A SECRET

菊地成孔 (sax, key) 坪口昌恭 (piano, key) 菊地雅晃 (bass) 藤井信雄 (ds) サラマンドル弦楽四重奏団

てとくべつ映画に拘泥するわけではないけれども、ゴダールやルイス・ブニュエルといった映画史上の巨人たちがときに大爆笑しながら成し遂げたであろう物語の実践、ああいったことを今やっている唯一のひとが菊地成孔であるというのもまた、確かである。ぼぼ映画、ほとんど映画だ。それを、じい、と見つめているのがぼく、そしてあなたであるというのもまた、「存在する」真実である。今年もまた宣言するが、菊地さんの音楽は、映画以上に映画のようなことになっている。たとえアルバムタイトルが人類学者レヴィ=ストロースの大著の名を借りたものであったとしても、あなたは著者に気兼ねすることはない。何よりも先にその物語があなたに官能と哄笑の入り交じった深いため息をつかせるであろうことは、今さらぼくが言うまでもないが。

NARUYOSHI KIKUCHI

Grace Mahya

グレース・マーヤ



The Look Of Love / Grace Mahya

4カ国語を自在に操る、驚異の Cross-Culture 感覚派アーティストが衝撃デビュー！
Jazzyでハートフルな Splendid Voice と、超絶甘美な Piano Style が織り成す独自の世界観・・・

01. The Look Of Love / 02. My Favorite Things
03. The Boulevard Of Broken Dreams / 04. Tennessee Waltz
05. Ribbon In The Sky / 06. Danny Boy / 07. Caravan
08. La Chanson D' orphee / 09. Sixteen Tons
10. My Way / 11. You Are So Beautiful

Produced by 伊藤八十八
Arranged by Grace Mahya & 河野啓三
Recorded at Sony Music Studios Tokyo

■パーソナル
グレース・マーヤ (Vocal,Piano)
河野啓三 (Keyboards)
須藤満 (Bass)
坂東慧 (Drums)
小沼ようすけ (Guitar) on ~ 1.4.5.8
越田太郎丸 (Guitar) on ~ 2.3.6.7.9.10
宮崎隆睦 (Saxophones) on ~ 2.3.7.10
仙道さおり (Per) on ~ 1.3.7.8.10
Mamadou Lo (Per) on ~ 4.5

VRCL-11003 Hybrid Disc (CD&Super Audio CD)
¥2,940 (税込)
2006/10/18 RELEASE

グレース・マーヤの歌声に初めて触れたのは、業界関係者でござ返す盛大な立食パーティー (@ STB139)での初お披露目ステージだった。華やかにドレスアップして登場し、〈The Look Of Love〉1曲だけを歌って袖に消えた彼女の印象は、その宴の場の空気も作用して「新人でありながら随分とまあ、落ちついた風格のコだな…」という程度のものであった。

数日後、今度はワンマン LIVE (@ Jz. Blod) を観て、そのキュートな存在感、MCで「私はジャズに出遭ってまだ2年なんです(笑)」と屈託なく語る自然体ぶり、ゆえに日々吸収中であるコトの歓びを全身に漲らせている向日性、日本語・英語・ドイツ語・フランス語を自在に操りながら嫌味な感じを微塵も感じさせない独特の親近感…等にたちまち、魅せられてしまった。「こんな才能

間を取って心に染みてくるロシアの音楽が好きだった」らしい。「好きなもの以外は完全にブロックしてしまう性格」の少女は日本の流行歌も子供向け番組にも無関心で、「唯一『ルパン三世』と、なぜか能の番組だけ(笑)」に興味を示す子供として育つ。ドイツ留学時代は「クラシックとテクノの両方に親しむ日々」を送るが、アメリカン・ポップスやロックの類い、スタンダード・ナンバーやビートルズの名曲も「最近になるまで全然知らなかった」と明かす。

ジャズは留学中にほんの3ヶ月間だけ、「いつも譜面どおりに弾くガチガチのクラシックの生徒たちがアドリブの崩し方などを学ぶ」一つの教養科目として習い、触れたのみ。が、そんな彼女がなぜ、どうして帰国後はジャズに接して、その「運命的な」邂逅からわずか2年で“期待の新人ジャズ・シンガー”

アノが得意ならばもったいないから弾き語りをしてみたら」と奨められ、初めてジャズを齧る。大学の3ヶ月間で習ったコトが大いに役立った。「初めて弾き語り挑戦した瞬間、もお、ジャズに一目惚れしました！」と明かすマヤが後日購入したマイナス1、そのピアノ抜きの教則 CD でドラムを叩いていたのがバイソン氏だったという“宿命の構図”も面白いが、とにかくマヤという天才ピアノ少女は今秋、「グレース・マーヤ」として我々の前に衝撃登場した。

4ヶ国語を理解する彼女のドイツ生活中、最大の事件は「もちろん9・11」。さまざまな言語の報道番組が流されているEUのTV環境下では「イラクで深夜、爆撃がありました。とにかく音声だけでもお聞きください」と2分間ほど、爆音や人々の叫び声、なかには子供たちの声も聞こえてきて

大輪の「華」が咲く予感！ 驚異の新人、“ジャズの神に選ばれる”までの足跡。

text by JazzToday 編集部



が一体全体、どう花開き、どう咲いたのだろうか!? というのが本人に会うまでの最大の関心事となった——2歳で鍵盤に触れ、3歳からクラシックピアノ/ヴァイオリン/バレエを習い、4歳でピアノコンクールで初入賞。「いずれ海外に出てゆく際に役立つから」との母親の考えから横浜のアメリカン・スクールに入学し、9歳でパリに夏期留学を。やがてドイツのフライブルグ国立音楽大学ピアノ部門に入学し、大学院まで進んで帰国する…という英才教育の流れを網羅するだけでも思わず溜息が出てくるが、真に興味ぶかいのは「将来はバレリーナになってほしい」との願いを込め、「マーヤ・プリンセス・カーヤ」というロシアのバレリーナに因んで、長女を「マヤ」と命名した母親が毎日頃言い聞かせてきたという「教え」のほうである。

緻密な英才教育の舵取りをしながら、母親はいつも「いろいろな経験をしなさい。生きなければ音楽はできませんよ。庶民の生活が分からない人間はそれだけの音色しか出せないものなのよ」あるいは「自然体でいるコトが一番大切な。音楽も同じですよ」という信念を愛娘に伝えてきたという。

一方の本人は、少女時代から「暗くて重い、いつも雪が降っているような、たっぷり

としてCDデビューするまでに転身したのか。「日本を離れ過ぎたし、しばらく自分の側にいて欲しいという母の希望も汲んで」一時帰国したマヤは、「そのうちドイツに戻って向こうで暮らすつもりだった」が「何かバイトをしないと生きてゆけないから」実家の前にあるファーストフード店で働いてもみたが、「マニュアルの日本語が上手く話せない(笑)、女の子は白い靴下を履くという就業規則が理解できなくて(笑)」5日と続かなかった。ピアノの才能を活かせるバイトなのでは、と思って飛び込みでジャズ Bar の扉を叩き、「断わるにしても、とにかく1曲だけでも聴いてからにしてください！」と売り込んだら、「歌えるの？」と聞かれて「思わず『歌えます！』と応えて(笑)」ぶっつけ本番のオーディションに臨む。が、知っている曲は「母親が大好きで私のララバイでもあった〈Tennessee Waltz〉と〈ケ・セラ・セラ〉しかなかった」ので、果敢にもそれを披露する。即席の歌伴を頼まれたバイソン片山氏は「呆れてスティックを落とした、と今でも笑い話で言いますね(笑)」という光景が展開された。

ところが「その歌が妙に受けてしまって」採用され、件のベテラン・ドラマーから「ピ

…今でも思い出すと涙が出てきますが、そういう日本ではありえない報道のありようを体験できた」。母国語の違いがそのままバイアスの相違につながり、バイリンガルの彼女は自然と複数の見解を前に思考する。そんなマヤが歌う初々しいジャズ・チューン——ネイティヴな発音が「ジャズの神に選ばれた」天性の声質と併走し、とても目下勉強中の新人には思えない。聴く側がどうか、その歌声に「若さを越えた母性」を覚えるのも「いろいろな経験をしなさい。生きなければ音楽はできませんよ」と教えられてきた少女の生き方が投影されているからに違いない。グレース・マーヤ、大ブレイクの予感がする！

Grace Mahya Live Schedule

10/26 横浜 Bar Bar Bar (Tel: 045-662-0493)
10/30 椿山荘イベント (Tel: 03-3943-1140)
11/02 六本木 alfie (Tel: 03-3479-2037)
11/07 大塚 GRECO (Tel: 03-3916-9551)
11/10 横浜 KAMOME (Tel: 045-662-5357)
11/14 新宿 DUG (Tel: 03-3354-7776)
11/17 青山 D's Bar (Tel: 03-5785-9360)
11/19 丹沢 青山荘 (Tel: 0463-75-2626)
12/11 横浜 KAMOME (Tel: 045-662-5357)
12/14 青山 D's Bar (Tel: 03-5785-9360)
12/16 銀座 ヤマハ (Tel: 03-3572-3135) ※入場無料
12/25 新宿 DUG (Tel: 03-3354-7776)
12/26 新宿 DUG (Tel: 03-3354-7776)

【Official Web Site】
www.gracemahya.com



Tiffany

ティファニー

諦めないで、夢見る力が「日本」で成就!

「親日家」ティファニーのシンデレラ物語。

text by JazzToday 編集部



のちに「撰ばれる人」の前史/足跡/「神の手」に触れたきっかけを聞き書きするのは面白い。前掲の Grece Mahya (グレース・マーヤ) の場合はジャズ Bar のドアを果敢に叩いた勇気がコペルニクスの転身のチャンスを生んだが、彼女と奇しくもデビュー盤の同日発売日が重なった Tiffany (ティファニー) の場合も異国の空の下でたまたま訪れたライブハウスでの意気投合劇が「想定外の夢の成就」につながった。尤もロサンジェルス生まれで、父親は教会の音楽監督、母はやはり教会でソロ歌唱を担当する技量の持ち主、という黒人の音楽一家で育った

ティファニーの場合は「本来の夢」を手にしたわけで、純粋なクラシック少女が電撃的にジャズの稲妻を受けて「変身」したマーヤの例とは、同じシンデレラ物語でもその序章部分がまるで違う。恵まれた音楽環境で育ったティファニーは、数多の黒人音楽アーティストの御他聞にもれず、「最初に言葉ありき」ではなく歌い始めるほうが先だった。母親の口真似でシングして、5歳の時には早くも教会でソロ歌唱を担当している。小・中学校時代は聖歌隊と合唱部にも在籍し、両親も当然「この子の将来はきっと歌手…」と夢見ていた

らしい。が、当人は大学進学を機に「社会学へのめり込んで」勉学に励み、そのぶん一時は歌の世界から遠ざかってしまったとか…。しかし、この「歌を忘れたカナリア」の季節が「逆に自分にとっての歌の意義、大切さを教えてくれたのです」というから人の運命はわからない。当時 23 歳のティファニーは気分を一新し、ジャズ・シンガーにして大学の講師でもあったサニー・ウィルキンソンの特別クラスに入るべく、難関のオーディションを受けて合格を。その授業でジャズと歌の基本を学びながら、その伝統音楽

の魅力に耽溺する。

が、「いつかはジャズ・シンガーに!!」という秘めた情熱、日々の練習と努力、決して諦めない人生の目標が、ひょんなきっかけから花開いた舞台は母国ではなく、教師という仕事の関係上たびたび行き来していた日本での偶然に近い「出遭い」からだった。

彼女自身の口から「日本とのえにし」を語ってもらおう。「私が 10 歳の時にたまたま家族旅行で来日した経験があるのですが、以来なぜか父が日本を気に入ってしまい、何度も独りで訪れるようになったんですね。そのうち週に 2~3 日は和食がテーブルの上に並ぶような家庭になってきて(笑)、それほどまでに父を魅了する日本という国には私も自然と興味を覚えたし、いつかは再び足を運ぼうとは思っていたんです」。そんな背景があったから、歌手を夢見ながら「生きるために別の職業を選んだ」彼女が日米を行き来するコトに抵抗感は一切なかったという。

それどころか、この度々の来日がきっかけである日、幸運が訪れる。「たまたま入ったライブハウスで(女性ばかりのジャズ・トリオ)鳥尾さんの演奏を聴き、その場で『歌ってみますか?』と誘われてステージに上がったら意気投合しちゃって(笑)、その後も共演を重ねているうちに伊藤八十八プロデューサーから白羽の矢が立てられたのだという。「神様にいただいた自分の声」がジャズ王国の辣腕仕掛け人によって「撰ばれた」わけである。

レコード会社のプレス資料に曰く、「エラ・フィッツジェラルドやサラ・ヴォーンを髣髴とさせる本格派大型新人デビュー!」、確かに本国アメリカのジャズ・シンガーが日本制作盤を録音した例は数多あるけれども、このタイプの新人歌手が日本でデビューした例は稀だろう。

彼女が新人らしい素直さで「好きな先輩歌手」として名前をあげているのは、シャーリー・ホーン、ダイアン・リーヴス、カサン

ドラ・ウィルソンの 3 人。それぞれの魅力をティファニー自身の言葉で語ってもらうコトで、ジャズに関する彼女の咀嚼/吸収度を探ってみようと思図したら…こんな答えが返ってきた。

「シャーリー・ホーンは空間というか、間の使い方が素晴らしいですね。彼女ほど巧い人は、他に聴いたことがありません。アルバムを聴いているだけでも、思わず耳が真剣に対峙してしまう。「いったい次には何が来て、どんなコトが起きるのかしら?」って、自分の神経が研ぎ澄まされて聞き入ってしまいます。本当に空間の使い方が絶妙で…歌う本人に相当自信がないとあはできないな、という部分に非常に關心させられますし」

それはティファニー自身が子供の頃から慣れ親しんできたゴスペルやポップスの「間」とはかなり違う、独特の印象を与えたという。

「ええ、それらの音楽は「間を空ける」というよりも、間をつめてどンドン重ねてという音楽でしたから。シャーリー・ホーン特有の間に会った時は「ああ、こういう音楽の伝え方があるのか!」って思わず、スクッと背筋が伸びましたね。次のダイアン・リーヴスはイントネーションの持っていく方とか、その歌手としての表現方法の秀逸さには「越えられないような存在感」を覚えますね。ラテン・リズムの使い方とかも凄く絶妙で、そういうところが非常に好きなんです」

では、比較的世代の近いカサンドラに関しては、どの点に魅力を感じているのだろうか?

「カサンドラ・ウィルソンはまず、あの低音。ナンと云うのかゴージャスで本当に深く、芳醇で。まるで年代もののワインのような、あの低音に魅せられています。私が一番好きな楽器もベースなんですが、彼女は人間の声なのにそれに通じる低音を出せる点が素晴らしいと思いますし。それでいて歌のなかにちゃんとフォーキーな要素も感じさせ

Tiffany Live Schedule

- 10/29 横浜 KAMOME (Tel : 045-662-5357)
- 11/3,4 GINZA INTERNATIONAL JAZZ FESTIVAL 出演
- 11/17 六本木 Alife (Tel : 03-3479-2037)
- 11/18 青山 D's Bar (Tel : 03-5785-9360)
- 11/20 新宿 DUG (Tel : 03-3354-7776)
- 12/2 御茶ノ水 NARU (Tel : 03-3291-2321)
- 12/16 銀座 YAMAHA (Tel : 03-3572-3135) ※入場無料
- 12/16 青山 BODY & SOUL (Tel : 03-5466-3348)
- 12/17 新宿 DUG (Tel : 03-3354-7776)
- 12/22 六本木 Alife (Tel : 03-3479-2037)

て…私はフォークソングを聴くのも大好きなので、あのふわふわした幽玄な世界を感じさせてくれるのがカサンドラ特有の大好きな部分なんですね」

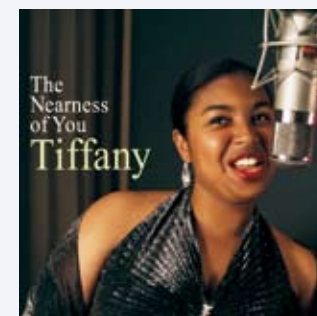
では、そんな聞き手としての鋭い感性を持つアナタ自身のデビュー作品は、いったいどんなものに仕上がったのかな?

「アルバムの世界観は聴く方それぞれの感じ方に委ねたいと思いますが、私自身としては「はじめまして、これが今の私です。ジャズにはいろいろな種類があって、さまざまなタイプの歌手がありますが、これが私です!」という自己紹介的な作品が出来たと自負しています。今の心境ですか? プロの歌手になる夢はずっと諦めないで来ましたが、まさかこんなに早くチャンスが訪れるとは思っていなかったので大変、興奮しています(笑)、その一言ですね」

先ほどの先輩陣は三者三様の個性を確立しているけれども、ティファニーが目指す歌手像は?

「まず、他の人とちゃんとコミュニケーションが出来る、話をきちんと伝えられる語り部でありたいですね。そのための方法や技術は日々勉強中ですが、一方に伝えたいという強い気持ちがあって、相手方にそれが通じた時に「何か」が生まれるわけですから、それをきちんと出来る存在になりたいと思っています」

古風でエレガントな衣装を纏ったジャケット写真、でありながら「今を生きる女性」の歌声が響いてきそうなデザインの妙。それはそのまま、このデビュー盤の魅力を巧く表わしている。



The Nearness of You / Tiffany

キュートでダイナミック。感動せずにはられない。若き日のエラやサラを髣髴とさせる本格派大型新人デビュー!

- 01. 月光のいたずら
- 02. いつか王子様が
- 03. 恋をしましょ
- 04. サマータイム
- 05. ザ・ニアネス・オブ・ユー
- 06. ベーバー・ムーン
- 07. バイ・バイ・ブラックバード
- 08. イット・クッド・ハプン・トゥ・ユー
- 09. ミステイ
- 10. ルート 66
- 11. マイ・ファニー・ヴァレンタイン

- パーソネル
- ティファニー (vocal)
- レイモンド・マクモーリン (tenor sax)
- 海野雅成 (piano & Fender-Rhodes)
- 鳥越啓介 (bass)
- ジミー・スミス (drums)

2006年 ソニー乃木坂スタジオ録音

VRCL-18834 Hybrid Disc (CD&Super Audio CD)
¥2,835 (税込)
2006/10/18 RELEASE
完全生産限定盤、高音質アナログLPも同時発売!
VRJL 7034 (LP) ¥3,360 (tax in)



ひたすら楽しそうなアルバム

「陰気さ」の微塵もない、モヒカーノの第3弾 !!



text by 前泊正人

楽しそうだなあ。

このCDジャケットを手にとりて感じた、率直な感想である。爽やかで暖かなパステルカラーの配色に、躍動感溢れる演奏者たちのイラストが、これまたすこぶる歌っている。もうひとつ、アクセントとなっているいちばん下の「モヒカーノ関ラテンジャズ八重奏団」の文字。あえて日本語表記としたところが逆にインターナショナルっぽくて、しかも今っぽい。カタカナと漢字って、微妙にラテンのイメージにマッチしてて微笑ましい。もともとラテンとは、混血が普通であるという訳の分からない文化なわけだから、日本というオリエンタルな彩を加えることで、美しくも不条理に満ちた魅力が、さらに強化されたような気がするから不思議だ。

この『サルテモス!』は「モヒカーノ」こと関 恭史のリーダー作の第3弾にあたる。第1作目は2000年のファーストアルバム『エル・ソニード・コン・エル・ピエント』で、サンバありサルサありの、楽しくなくっちゃジャズじゃないぜとばかりにラテンパワーが炸裂。これぞ名刺代わりの一発といった感じの洗刺デビュー作品であった。つづく2002年セカンドアルバム『フエゴ・デル・アルマ』は、打って変わって、おもいっきりジャズよりの大人び

た作品。ラテン度が薄まったものの、音楽に対する熱い情熱は些かもうせることなく、ピアニスト関 恭史の幅広いフィールドワークを感じさせる、ひと味もふた味も違う作品となった。どちらも甲乙つけがたい素敵なお作品だ。今回のこのサードアルバムでは、これまでの作品の良いとこどりとって感じで、楽しさにくわえ、哀愁も適度にまぶしてあって、ちゃんとラテン音楽している。切れあじ鋭い重厚なプラス・セクションに力強いリズムセクションを組み合わせたアフロ・キューバンなスタイルから繰り出される、難解な変則ビートに陽気なメロディーと親しみやすいフレーズ。トリッキーなキメが面白いようにビシバシ決ま



EWE EWCD-0128 ¥2,500 (税込) 2006/10/10 Release

る。まるで計算してグルーブを生み出しているのかとおもうほど、一条乱れない完璧な演奏。でも、ミスらないようにミスらないように、みんなヒイヒイ苦しみながら演っているようには聴こえない。困難なアレンジをむしろ喜んでるかのよう。いや絶対、楽しんで演奏しているにちがいない。気持ちは聴くものに確実につたわるものなのだ。

オープニングは〈Funky Dancing Cobra〉。関 恭史の勢いよいピアノが導線となって導かれるプラス陣とコンガとティンパレス。しなやかに、コブラをも踊らせてしまう。〈Sergio's Funk〉の4分10秒あたりに、ピアノとアルトサックスの絡みから、つづく関のピアノ・ソロがゾクゾクさせてくれる。ソコがつぼというのを知っている。さすが。〈Nuestra Cancion〉は、咽び泣くような鈴木雅之のテナーサックスの哀愁が、なんとなく、ヨーロッパの前衛を巧妙に吸収し同化した結果として、70年代に己のルーツであるラテン・アメリカへ回帰したアルゼンチン出身のテナーサックス奏者を髣髴させる。

そしてラストの〈In The Serenade Tonight〉、これが圧巻。心地よい読後感のような気持ちにさせてくれるピアノ・ソロなのだ。この繊細な構成力の素晴らしさは日本人ならではのものではなからうか。

ああ、もう最後の曲かと思わせる作品ほど充実している作品の条件だいつも感じながら聴いているのだが、久しぶりにこの『サルテモス!』は終わって欲しくないと思わせてくれた、そういうアルバムだった。

それにしてもジャズのもつ影というか、陰気でスピリチュアルといった要素が良い意味で微塵も感じない。ファーストからサードまで、関 恭史の音楽には一貫して、まぶしい太陽と青い海と爽やかな風を感じる。

しかし、ラテンとは、なんと魅力に充ちた風土なのであろうか。

サルテモス モヒカーノ関ラテンジャズ八重奏団

翔ぶ! どこまでも...熱風にあおられ自在に駆けめぐるグルーブ。豪腕ピアニスト、「モヒカーノ」こと関 恭史のサードアルバム登場。とびきりの才能を結集し、パワーのすべてを注ぎ込んだラテンジャズを超えるラテンジャズ。強烈!

- 01. Funky Dancing Cobra / 02. Caribbean Step
- 03. Ique Importal / 04. Shonan Gang Part III
- 05. Sergio's Funk / 06. Nuestra Cancion
- 07. Moonlight Surfs / 08. Phalanx Shift
- 09. Ocho Estrellas / 10. In the Serenade Tonight

■パーソネル
関 恭史 (p) / 平川象士 (ds) / 美塵 Mizalito 良彦 (per)
今福健二 (per) / 中路英明 (tb) / 鈴木雅之 (ts)
藤田明夫 (as, ss, fl) / 中路英明 (tb) / 高橋ゲタ夫 (b)

南博

Hiroshi Minami



「とどまる」ことを奏でるピアニスト。

南博の『エレジー』を聴きながら

text by 若林 恵



Elegy / 南博

「誤解を恐れずに言えば、この作品は南博の鬱性が生んだ傑作である。」——菊地成孔

EWCD-0107 ¥2,500 (税込) 2006/9/16 RELEASE

- 01. Elegy 2 / 02. Piano Improvisation #1
- 03. Elegy 3 / 04. Piano Improvisation #2
- 05. Piano Improvisation #3
- 06. Remember - Piano Solo-
- 07. Remember - Strings Quartet-
- 08. Angel Eyes / 09. Piano Improvisation #4
- 10. Stars / 11. Piano Improvisation(Epilogue)

南博 (P) / 鈴木正人 (B) / 芳垣安洋 (DS) / 平澤 仁
森 ゆり子 / 伊能 修 (1st Violin) / 水鳥路 / 執行
広島 美香 (2nd Violin) / 高平 純
安藤 裕子 (Viola) / 荒 庸子 (Cello)

僕が一番最近南さんにお目にかかったのは、ブラッド・メルドーの公演会場であった。アンコールもそこそこに席をたって、ロビーで連れが出てくるのを待っていると、がらんとしたロビーを帰途につく南さんが横切った。

「どうでしたか、メルドー？」
そう訊ねると、南さん。
「もういいかなあ、って感じですねえ。パット・メセニーみたいだったね」

と、おっしゃる。多分、メルドー氏がメセニー氏と競演盤を出したばかりだ、ということは知らずに言ったのだと思うのだけれども、そうであればこそ、さすが鋭いなあ、と僕は感心した。たしかにその公演の演奏は、どこか「メセニーみたい」だった。そして、僕はメルドー氏の華麗なプレイが、南さんのお気には召さなかったことが、なんだかとても良く理解できた。

悪く言ってしまうと、その日の演奏はどこか上滑りをしてた。饒舌すぎた。一方の南さんはといえば、ピアノが上滑りしてしまうことを何よりも恐れるような、ことさらそんな弾き方をする。つまらない比較ではあるけれど、僕はこの『エレジー』を聴きながら、メルドーのロマンチックな音楽を「流れていくもの」として、逆に南さんの音楽を「とどまろうとするもの」として対置することができそうに思えた。

とどまる、という言葉に僕はなんの否定的な意味をこめてはいない。むしろ積極的に肯定したくて使っている。世の変化のスピードが加速度的に増していくなかで、人も音楽も、「流れていく」ことよりも、「とどまってる」ことのほうがはるかに難しい。そし

て、それを積極的に選びとるにはよほどの勇気が必要だ。そのなかであえて「とどまる」ことの困難を、南さんの場合、頭や理性でというよりも、さもそれを指自体が選んでいるかのように訥々と語っていく(僕がここで言っているのは、音楽的に停滞している、とか、やっている音楽が時代遅れだ、といったことはまったく関係がないことだ。音楽的なことを言うのであれば、プロダクションノートに菊地成孔氏が書いている『『都市性』と『未来性』に漲っている』という言はまさにその通りだと思)。

南さん自身の言葉によれば、本作は「孤独」がテーマだそうだが、それを僕は「とどまる」ことの孤独」と言い換えてみたい。と、書いてみた後で、それは同義反復なのかもしれないとも思ってみたりするのだが、いずれにせよ、だ。ジャズに魅せられてしまったことで音楽学校を放り出され、バブル全盛期の銀座のクラブでピアノを弾いて貯めたお金で単身渡米し、帰国後地道に演奏家としての地位を固めてきた南さんは、頑なまでにピアノのそばに「とどまりつづけた」のではなかったか。そして、どんな境遇にあっても、南さんの「孤独」はそのなかでへこたれることなく鍛え抜かれ、指の先の先にまでそれは宿ることとなったのだと、僕はそんなことを『エレジー』を聴きながらぼんやりと思う。

耳を澄ませば、街の喧噪をよそに、ネオンの光のなかをうつむき加減に歩いていく悩ましいピアニストの姿を見ることができかもしれない。場所は銀座か、ニューヨークか、あるいは南さんが青年時代ただひとりピアノの師と仰いだ巨匠・宅孝治が戦前に歩いたパリの街路かもしれない。そのピア



PHOTO by Nicola Fasano

ニストの孤独は、決して他人ごとではない。それはいつか、都会のめまぐるしさに疲れ、とどまりたいと願いながらも時間に追われつづける、自分自身の孤独と重なり合っていく。「オレ、何やってるんだろ」と自問しながら孤独と向き合い、自分の信じる場所にとどまりつづけることは不安なことだ。置いていかれてはしまいいやしないか。人に笑われやしないか。誰にでも経験のあることだ。そんなとき、南さんのピアノは、間違いなくそばにいてくれる。悩めるピアニストが、38分15秒というほんのわずかな時間の間だけは、きっと孤独を分かち合ってくれる。



Touches & Velvets (Quiet Dream)

南博

EWE EWCD-0088 ¥2,500 (税込) 2004/10/21 Release

触れる官能。異界と現実のニューヨークを結ぶ、孤高のジャズピアニストによる珠玉のウィズ・ストリングス。(菊地成孔プロデュース)

- 01. B Minor Waltz (Bill Evans) / 02. Scramble from the Apple (Charlie Parker) / 03. Madrugada (Hiroshi Minami) / 04. Quiet Dream (Hiroshi Minami) / 05. Closing Velvets (Naruyoshi Kikuchi)

#1,#2 Arranged by Hiroshi Minami
Strings Arranged by Nobuyuki Nakajima
Produced by Naruyoshi Kikuchi
Hiroshi Minami (piano) / Horacio "El Negro" Hernandez (drums)
Carlos Del Puerto (bass) / Hiroaki Mizutani (bass) on #5
Orchestrated by Nobuyuki Nakajima
Ensemble
Violin : Chiyoko Noguchi / Yuko Kageyama / Hazuki Yamamoto
Yukiko Teraoka / Yuko Araki / Wakako Hanada
Viola : Fumiko Kai / Miho Kisanuki Cello : Tomoyo Kikuchi
Flute : Dohgen Kinowaki



HANK JONES

JazzToday Special INTERVIEW

ハンク・ジョーンズに 会ったんだ!



連載第4回

CBS時代の「真夜中はべつの顔」。

聞き手：末次安里（本誌編集長）

JT：ハンクさんは50年代後半から70年代初頭までCBSのスタッフミュージシャンを務められました。それは思うところがあつての転身だったのですか？

HJ：「実際はとりたてて理由らしきものがあつてのCBS入りではなかったのですが、背景としては1950年代辺りからいわゆる「アフロ・アメリカンの人たち」にもっと雇用の場を与えよ、もっとスタッフに登用せよという動きがあつたのは事実なんです。それは何もCBS一社に限らず、ABCやMBCなんかの他のテレビ局でも黒人をスタッフに受け入れる流れがありましたから。たとえば私はCBSに行きましたが、クラーク・テリーはMBCに行ったりとか、他の仲間はどこどこへ...という門戸開放のようなかたちで皆が仕事を獲得していったわけですよ」

JT：日本のジャズ紳士録ではその時期の仕事ぶりが曖昧なままなのでお聞きしたいのですが、CBS時代も純粋なジャズ活動は同時併行でなさっていたわけですか？

HJ：「その質問を“当時もナイトクラブへの出演はあつたのか？”という次元に絞るのであれば、それはもう現実問題、時間的に無理でしたよね（笑）。たとえば一回、サド・メルの仕事がヴァンガードであるぞといった時に、2〜3週間出たコトがあるんだけど...ナイトクラブだと深夜2時半くらいにようやく最後の仕事が終わって、それでも自分は翌朝7時までにはスタジオに行かなければいけないという状況があるわけで、するどう寝る時間がなくなってしまうんだ」

JT：ア・ハードデイズ・ナイトの連続になってしまいますもんね。

HJ：そう、なのでナイトクラブの仕事を併行してやるというのは結局難しかったんだけど、ただ、フリーランスのミュージシャンとしてレコーディングだけはいろいろと参加してましたね。たとえばスタジオのほうの仕事が20時に終わって、その直後からレコーディングに参加し

ても3時間程度で大概は終わるからね。0時には眠れて、次の日の仕事にも支障がないというかたちでしたから」

JT：要はジャズメンとしての生き方を一時的にでも退いていたわけではないのですか？

HJ：それはいいですね（笑）。海外の仕事にこそは行きませんでしたけど、決してジャズを離れていただけではありません。あの当時はジャズ・ミュージシャンが生活のために海外で暮らしてとか、国内をツアーしたりという向きもあったけれども...私の場合はNY近隣に限定されてはいましたけれども、そういうフリーランスのレコーディングもしていましたし、たとえばアンディー・カークとかベニー・グッドマン、アーティ・ショウやジョン・カービーなど、これらのビッグバンドには参加してました。しかしながら彼らのツアー自体がそれこそNY近隣でしか行なわれないという情勢もあつたので、海外の方々にはそういうふうには映ってはいないのかもしれませんがね（笑）」

JT：わが国の場合、ザ・グレートジャズ・トリオの誕生が“ハンク健在！”の印象を与えたのですが、最初のアルバムはどのような経緯で録音ま



で進んだのですか？

HJ：実際のアイデアはEAST WINDという日本のジャズ・レーベルがありまして、そこが発端というのが正直な経緯で、トニー・ウィリアムスとロン・カーターとそれから誰かピアニスト（笑）を組み合わせたら面白いんじゃないかとたぶん、発案者は思われたんでしょう。前者の二人は当時もちろん、揃って大変な売れっ子ミュージシャンだったわけだから、まずは二人のスケジュールを確認して、僕の場合は確か、ロンから『こういう企画があるんだけど、やらないかい？』って電話があつたのを憶えているよ（笑）。それをグレートジャズ・トリオと名付けようという話も、僕の知らないところでなんとなく決まっていた部分もあつて（笑）」

JT：ああ、そうなんですか。確かヴァレジジアンガードのオーナーのマックス・ゴードンが最初に名付けたようなことを読んで記憶もあるんですけども...

HJ：ああ、そうかな、うん、そっちが先だったかもしれないなあ。というのも僕らの演奏でアルバムになったものの凡そ半分はヴァンガードでのライブ録音だったし、その前後にスタジオに入っているという流れがあつたしね。このアルバムのこの部

分はスタジオ、この部分はライブというのがよく混じっているの、そういえば最初はヴァンガードだったかもしれないなあ（笑）」

一次号に続くー



JUMPIN' WITH JONAH / The Jonah Jones Quartet

「ジャズ・スタンダード」への想いを込めて。

中村健吾、新作の「いきさつ」を語る

Interview by 成田 正



—色々な編曲が楽しめるスタンダード集ですが、いきさつを教えてください。

中村：ニューヨークで小曽根真さんと食事している時の世間話が引き金で、深い訳はありません。ひらめきってやつです。

—ニューオリンズは何か関係してませんか？
中盤の2曲がもろにそのテイストで盛り上がりませす。

中村：ええ、今年の春に仕事で行った時、カトリーナの爪痕に愕然としました。場所によっては全然復興の様子がないんです。という一方、プラス・バンドと一緒に街を行進して、すっかり味をしめちゃった（笑）。

—では、選曲もそんな思いを胸に？

中村：大好きな曲ばかりリストアップしていったけど、潜在的な働きはあつたでしょうね。

—でも、好きな分だけ、やりがいもあれば苦勞も多い？

中村：その通り。〈星影のステラ〉のコード進行を使った〈ステラ〉は、ビ・バップの雰囲気を出すため1日に1、2小節しか進まない時もある四苦八苦。その反面、〈オール・ザ・シングス・ユー・アー〉では、7拍子をスウィングさせるリズム・アレンジを偶然見つけて自分でもびっくり（笑）。ほかでも色々なアプローチに挑戦してます。

—楽器編成が曲ごとに様々なのも、編曲に準じた恰好ですね。

中村：それに、ベーシストのアルバムならではのよ、ピアノレスにしたリオルガンとのデュオにしたりするのは。ピアニストやホーン奏者のアルバムではこうはいかない。もちろん楽器編成はすべて音楽的理由からです。

—いずれにしても、「ベース=ボトム」がしっかりしているからこそできることですね。〈ミッドナイト・ブルース〉は、レイ・ブラウンっぽい感じが何とも言えない。

中村：それは嬉しいな。ブルースはとにかく力を抜いてリラックスしてやりたいんですよね。夜のアフター・アワーズの感じが出てきて欲しかった。—オリジナルのほうでは、2枚目のアルバムに入っていた〈ホープ〉を再演してますね。

中村：これは9.11のテロの直後に、平和への願いを込めて書いた曲で、あの時はベース・ソロだったんですが、今度はバンドでやってみたくて。あれから5年経っても世界情勢は悪くなる一方、ニューオリンズも早く復興して欲しいし...

—小曽根真のオルガンとデュエットした〈自由への賛歌〉にもそんな響きが感じられました。

中村：そうですね。これは小曽根さんのおかげで、深くスピリチュアルなプレイができたと思います。

—いずれにしてもどうでしょう、編曲の妙味をつかめましたか？

中村：まだまだ勉強すべきことは山ほどあります



が、分かってきた気がしました。編曲が上手くいった時の「曲がこんなに変わるんだ」という嬉しいショックは、作曲の時と全然違いますからね。いずれはビッグ・バンドもやってみたいな。



55 RECORDS FNCJ-5518 ¥2,500 (税込)
2006/10/25 Release

リコーディング・スタンダード 中村健吾

ニューヨークの俊英たちを迎え、スタンダードに真正面から取り組んだ快心作登場！

- 01. イッツ・オール・ライト・ウィズ・ミー
- 02. いつか王子様が / 03. イフ・アイ・シュッド・ルース・ユー
- 04. オール・ザ・ウェイ / 05. パーボン・ストリート・パレード
- 06. 懐かしのニューオリンズ / 07. 自由への賛歌 / 08. ステラ
- 09. ミッドナイト・ブルース / 10. オール・ザ・シングス・ユー・アー
- 11. ホープ / 12. この素晴らしい日々

■パーソナル
中村健吾 (b) / マーカス・プリンタップ (tp)
テッド・ナッシュ (d, a-fl, as) / ダン・ニマー (p)
小曽根真 (org, p) / クラレンス・ベン (ds)

2006年6月27、28日、ニューヨーク、アヴァター・スタジオにてダイレクト2トラック録音。
レコーディング・エンジニア：ジョー・ファラ



55 RECORDS FNCJ-5505 ¥2,500 (税込)
2005/2/23 Release

- 01. ルーツ / 02. DH スウィング / 03. フィフティ・ファイブ
- 04. シスター・セイディ / 05. ワンゴ・タンゴ
- 06. ノスタルジア / 07. ザ・パロン / 08. ブギー・ストップ・ジャッフル / 09. オール・ウェル・ウィズ・ユー
- 10. ブルース・フォー・ウェス

中村健吾 (b) / ウェス "ウォームダディ" アンダーソン (as)
マーカス・プリンタップ (tp) / ロドニー・グリーン (ds)
アーロン・パークス (p) / (5)(6)(9) 小曽根真 (p)
2004年6月23、24日 NY, アヴァター・スタジオにて録音。
レコーディング・エンジニア：ジェイ・メッシーナ

中村健吾NYクインテット

“Re:Standards” ツアー

- 11/22 (水) 大阪 Jazz on Top (Tel. 06-6341-0147)
- 11/24 (金) 神戸 Satin Doll (Tel. 078-242-0100)
- 11/25 (土) 四日市 アソシエード第一 KAIEN'S ROOM (Tel. 059-323-1233)
- 11/27 (月) 京都 RAG (Tel. 075-255-7273)
- 11/28 (火) 横浜 Motion Blue (Tel. 045-226-1919)
- 11/29 (水) 名古屋 Doxy (Tel. 052-242-1227)
- 11/30 (木) 静岡 Koln (Tel. 0545-52-0468)

- 12/01 (金) 東京 Body & Soul (Tel. 03-5466-3348)
- 12/02 (土) 東京 Body & Soul
- 12/03 (日) 館林 文右衛門ホール
(チケットぴあ：Pコード 242-537 Tel.0570-02-9999)

メンバー：中村健吾 (b) / マーカス・プリンタップ (tp)
ウェス・"ウォームダディ"・アンダーソン (as) / 海野雅威 (p) / 高橋信之介 (ds)

■総合問合せ：55Records Tel. 03-5785-2357



Guitar Renaissance III (翼) / 渡辺香津美



EWSA-0125 ¥3,000 (税込) 2006/06/07 Release

- 01. 虹の彼方へ (Harold Arlen)
- 02. クーラント 無伴奏チェロ組曲第 1007 番より (J.S. Bach)
- 03. 天国の階段 (Jimmy Page / Robert Plant)
- 04. クーラント " FROM HEAVEN " (J.S. Bach)
- 05. 翼 (Toru Takemitsu) / 06. MOMO (Koko Tanikawa)
- 07. 星影のステラ (Victor Young)
- 08. シェルブルの雨傘 (Michel Legrande)
- 09. IF I FELL (John Lennon, Paul McCartney)
- 10. クレオパトラの夢 (Bud Powell)
- 11. アストロ・ジャンプ (Kazumi Watanabe)
- 12. チュニジアの夜 (Dizzy Gillespie, Frank Paparelli)
- 13. 月の沙漠 (Suguru Sasaki)

渡辺香津美 : guitar / 中牟礼貞則 : guitar on tr.7
古部賢一 : oboe on tr.8 / 吉田美奈子 : vocal on tr.5

香津美、話題のギタリネIIIを語る。 vol.5

悩める時の武満効果。

聞き手: @suetsugu



なりのかたちでなんか武満さんの音楽にかかわっていききたいな、という想いが僕の中ではあって。それは渡辺香津美流の係わり方でいいのではないかと考えていますし。

Sue: 今回の〈翼〉もそうですが、そうして香津美さんなりに接していけると「武満音楽」が含まれている、どういう世界にきづかれますか？
渡辺: う〜ん…一言でいえばやっぱり、ふつうに自然の中にあたり響いたりしているというか、それが風の音だったり木の音だったり、それも決して「自然音」という意味ではなくて、「音楽」と「自然」「時間」とかいうものが非常に緊密に関係しているし。それから武満さんの遺された本とか書かれたものを読んだりしていると、凄くそれに影響されてしまうんだけど…やはり「沈黙」というものとかね。武満さんとキース・ジャレットが対談したものを読んだ時も、音楽に関して「どんなふうに弾くか」よりは「いったい何を弾くか」ということのほうが大事だということとかね。やはり自分と音楽の係わりについては折に触れて迷ったりすると、武満さんの曲を弾いたり、書かれたものを読んだりすることがあって。ハッとしたりすることがありますよね。

Sue: ああ、そういう存在として香津美さんのなかでは武満さんが「生きている」んですね。
渡辺: 一番大きいのは…音楽というのはやはりその流れが「音の河」というか、とうとうとしたものがあって。じつはその一つの流れから音を自分はこう拾っているという、見つけていくという…部分とか。それまでの僕はこう、音楽というのは「自分で作るもの」であって、なんか「やってやる!」と思ったりしてね(笑)、それがとんでもないことだったというコトを教えられた。だから、クリエイティブティやオリジナリティというものも凄く大事なことなんだけれども、なんかそういうものをどんどん無くていって「無」にすることで初めて、そういうものと交信できるというかね。キャッチできるというか、そういう気もしましたよね。頑張って「何か作るぞお!」って言っているうちは逆にそれが来ない、って。

Sue: 決して「量」では計れない存在として、香津美さんにとっても大きな人なんですね。

渡辺: やはり、全音楽的な意味での教えであるというかね、学ぶと言ってしまうと「勉強」になってしまったけれども、本当に気づかせてくれる、相当の人なわけで。それはパツパであったり、モーツァルトでも聴けば「オオッ…」と思うコトがあったりするんですけども、それよりも自分にフィットしているというのかな、何かね。

Sue: 前は偶然電車内で武満さんと遭遇し、香津美さんのほうから挨拶をされたらむしろ向こうが恐縮されたので意外だった(笑)、という話を聴きました。その後は？

渡辺: その後はずっとお会いする機会がなくて…あれは1990年か91年だったかな、八ヶ岳の高原音楽堂だったと思いますが毎年、あるいは2年おき位に武満さんのプロデュースでクラシックとそれ以外のものを行っている催しがあって。ギターをフェチュアリングする企画の際に、サブ・プロデューサーの佐藤紀雄さんというギターの方から「武満さんの催しに出てほしい」と声をかけられましたね。ついてはジャズ、ジャンゴ・ラインハルトはもちろんのこと、「ジョン・ルイスの〈ジャンゴ〉も是非やってほしい」という話になって…で、当時の僕は〈ジャンゴ〉がそれほど好きではなかったんですけども、言われたらしょうがないというか(笑)、アレンジしてやったんですけどもね。

Sue: それで武満さんと再会されたわけですね。

渡辺: ええ、それで一番印象に残っているのは、演奏が終わってから「部屋で飲み会をやりよう」ということになって。武満さんと長女の眞樹さんもいらして、井上陽水さんや小室等さんもいらして。皆でわいわい部屋呑みを楽しみながら、「じゃあ、ギターを持ってこよう!」というのでギターを持ってきて。そしたら「武満さんは服部良一さんの曲が好きらしい」というので、「武満さんに歌わせようよ」という発案が出たんですね。そしたら最初のうちは「いやあ、僕は歌いませんよ(笑)」とか言っていたんだけど、そのうち「じゃあ、キーはこれね」とか言い出して、それで僕が伴奏をしてという(笑)。その時に(ああ、こんな作曲家なのにこんなに無邪気に「僕はこの曲が好き」とかど仰って歌われるのか)って、そんなに巧いというわけではないけれども歌っている武満さんの姿を観てね、なんか「宇宙人みたいだな」って思いましたね。上手くは言えないですけども、なんか宇宙から来た人みたいなイメージは抱きましたね。

Sue: そんな交流がありながら決してお互い、ベタベタする関係ではなかったんですね。

渡辺: ですね。が、その後、眞樹さんに聞いたところによれば、僕が昔「KYLYN」というバンドをやっていた時期に六本木のピットインにいらしたらいいのね。なんか僕のファンだったということで娘さんを連れて、密かにライヴハウスに聴きにに来てくれていたらしいんですよ。そんな話も聞いたりしてチョット嬉しかったんですけどもね。その後、武満さんが早く亡くなられちゃったんでなかなかね、もうお会いすることは出来なかったんですけども…たとえば武満さんのギターの曲なんかを譜面そのままに弾くというのは自分のスタイルではないんですけども、僕

メジャーの既得権をインディーズにも!

PJL 淡中隆史

ジョルジュ・グルンツ、ティエリー・ラング、ディノ・サルレシ / トリオ・ターゲ

ポリスター・ジャズ・ライブラリー
MTCJ-3019 ¥2,625 (税込) 2002/10/20 Release

- 01. Milonga Del Dusente
- 02. Contigo
- 03. Angel' s Fly
- 04. Vivaldi
- 05. I Love my Brother till the End
- 06. Fragmento
- 07. A Star to my Father
- 08. Intermezzo 5/13
- 09. Nan



今回は Polydor Jazz Library、略して PJL の淡中さん特集。今まではマイナーなレーベルばかりを取り上げてきたが、今回は初のメジャー・レーベルだ。PJL (所属する「プレイエイド」) はレコード協会に入っているのでメジャーと呼んでも差しつかえないだろう。淡中さんは制作 / プロデューサー業務のみならず、他のインディー・レーベルのディストリビュートや宣伝業務もやっている。恐ろしく多忙なのである。

大学を卒業してすぐキング・レコードに就職。本来はクラシック、ジャズ、現代音楽が好きであったが、キングではそのジャンルに関する業務にはほとんど就かず、他のいわゆる洋楽の制作、宣伝をやっていたという。そんな折り直属の上司がキングを去り、ポリスターに転職。その上司からの誘いを受け続け遂に 15 年間勤務したキングから淡中さんもポリスターに転職。1989 年のこと。「その頃はね、Wink (注 1) が大ブレイクですよ。ポリスターが Wink でかなり潤った頃ですね。」じゃあ淡中さん、そこでもジャズ担当ではなかったの? 「ポリスターでも日本のロックとかいわゆる J-POP ですか。イカ天バンド (注 2) の KUSU KUSU とかもやりましたよ (笑)。」

ポリスターで 10 年働き、時は 1999 年。音楽業界は CD 売上が低迷し、次なるメディアに各社暗中模索し始め、再発、発掘音源、BOX セットなど、何ら新しい音楽の動きを提示できない各社レーベルの苦悩が色濃く

なってきた折り、社長から「ジャズやってみないか」との話を受けた。そりゃ嬉しかったでしょう。「いや〜、僕の口からはジャズをやらせてくれなんて言ったことないんですよ。結局売上がキツくなってきて、何か別のこと始めようってんで社長が『淡中くんジャズ好きだったよね』なんていうノリでね。」かくして PJL は淡中さんが発足した。苦節(?) 25 年の音楽業界での経験を今度は自分の好きなジャズで活かせるというわけだ。

PJL は、日本のフリー・ジャズ、ヨーロッパのピアニスト、Why Not (注 3) などなど現在 9 種類のシリーズを抱えており、淡中さんのプロデュースによるオリジナル制作は「PJL Original Recordings」シリーズとして 40 タイトルの作品をリリース。いや〜、でもこれだけのタイトル数をリリースしてたら赤字のタイトルも相当あるでしょう? 「えっとね、(デスクの上に散在した CD の各々を指さしつつ) これとこれとこれはすごく売れましたね。で、これとこれとこれはまあ▲枚くらいでね。会社でやっているとプレゼンの時にイニシャル枚数が■★枚以上売れなきゃまず外されちゃうわけですよ。つまり企画が通らないわけですね。いわゆるメジャーでは原盤を持っていてすら出せない作品も数多くあるということなんです。」なるほど。やはり会社は厳しいわけだ。でも私は個人的に売れてないほうの作品群に興味を持ったので、今後こういった世間的にあまり需要のない作品を出して広めてゆく戦術を

訊いてみた。「二つありまして、ひとつは採算ラインの何百枚か下の予測であれば足りない何百枚の分を自分でやってる営業での収入で補填するんです。その採算ラインに満たない作品が個人的には一番面白いと思ってますから。二つ目は旧来のジャズ・ファンは絶対には買わないものを敢えてジャズ売り場で売るといこと。それによってアンテナの鋭い若い人たちがジャズ売り場に来てくれるようになるんですよ。そうするともっと面白いものを知るチャンスにもつながる。」

「僕は販売側にいる人間ですので、オリジナル制作に限らずメジャーの既得権をインディーズのレーベルにも振り分けて共存したいんですよ。」

最後の一言、感動的。最近会社も大きくなって事務所も渋谷に移った。淡中さんのような人がもっとメジャーにいてくれたら、もっともっとシーンは面白くなるはずだが、いかんせんそういう理解ある男の出現は見込めないのが現状だ。淡中さん、頑張ってください!!

- (注 1) 鈴木早智子と相田翔子によるアイドル・ユニット。『愛が止まらない』(1989) が大ヒット。
- (注 2) 1989 年〜 1990 年に TBS で放映された勝ち抜きロックバンド番組に出演したバンドの総称。これによりバンドブームが再燃。
- (注 3) 評論家・悠雅彦が 70 年代中盤に立ち上げた先鋭レーベル。エアー、W. ディッカーソン、K. パロンなど傑作が多い。要チェックのレーベル。PJL からはすでに販売終了。



text by 沼田 順



先月号では MOONKS の面々が “ホーン” の逆襲” を鼓舞し、今回はタジマ画伯が “ホーンの特集” で仕上げてくださいました。ホーンの色に男さわぎがする季節の到来です!

ジャズ音楽堂

連載 8

ところでタジマ画伯の筆でぜひ、「あのジャケを描いてほしい!」という熱烈希望を心に秘めている方はいらっしゃいますか? 編集部 (sue@image.ocn.ne.jp) までリクエストすれば実現するかも…。

絵と文
タジマヤスタカ



スウィング・スワン・スウィング
ジャッキー・マククリーン

今月の表紙はベッパ―とマイルスのバックの面々が和やかに東西がっぷり四つ名盤『ミーツ・ザ・リズムセクション』。このページもアルトのワンホーンスタンダード集でいきます。

ジャッキー・マククリーン (as)、ジミー・ギャリソン (b)、ウォルター・ビショップ (p)、アート・テイラー (ds)
1959 年録音

マククリーンのワンホーンでのスタンダード演奏を存分に堪能できる人気盤ですね。ブルーノートのマククリーンと言えば、後期のハードな内容の演奏が彼の新骨頂なのかも知れませんが、やはりつついこのアルバムに

手が伸びてしまうファンの本音盤。たまらん。意表をつくミディアムテンポのいきなり〈ホワッツ・ニュー〉でつかみはオクテー。次は〈レット・フェイス・ザ・ミュージック・アンド・ダンス〉、ギャリソンがぐいぐい引っ張り、テイラーのハットと気の利いたスネアで推進力が増して、〈アイ・リメンバー・ユー〉、〈アイル・テイク・ロマンス〉…、ブルースで締めるラストまで一気にペロロと聴けちゃいますね、幸せだ。ビショップのピアノがこめられた光って、ともすれば単調になりがちなワンホーン演奏をカラフルに彩っています。

その独特のサウンドで長年に渡って多くのファンを楽しませてくれたこのジャズジャイアントも今年の春、とうとう旅立ってしまいました。ありがとう!ですね。



テイクス・チャージ
キャノンボール・アダレイ

御機嫌な1枚を。でっかい体で軽々と口笛でも吹くかのようなアルトさばき。ぐるぐると強烈にドライブしながら次々と宙に放たれるフレーズ。ジャズに何か新しい音楽を作り出した!とか、何かしらの問題を投げかけた!みたいなエライ事はぜんぜん無かったわけですが、あの天高く舞い上がる奔放なアドリブを聴いていると、そんな事あど〜でもいい。小難しい理屈は抜きにして、しばし愉快痛快!な快樂アルトを楽しみましょう。

キャノンボール・アダレイ (as)、ウイントン・ケリー (p)、ポールチェンバース (b)、ジミー・コブ (ds)、パーシー・ヒース (b)、アル・ヒース (ds)
1959 年録音

おやここにもバックに当時のマイルスバンドの面々が。この2週間くらい前に『カインド・オブ・ブルー』をキリキリと吹き込んだりしてたわけですがここではとてもくつろいだ雰囲気、気のおけない感じのインタープレイが楽しい。アルバム冒頭、キャノンボールの吹くテーマにケリーがからんでくるあたりで聴いてるこっちももうにっこりノリノリです。

曲は〈イフ・ディス・イズ・ラヴ〉、〈ハンガ・マイ・ティアーズ・アウト・トゥー・ドライ〉、〈アイヴ・トールド・エヴリ・リトル・スター〉などベタベタ過ぎずにちょっと洒落た感じの選曲になっています。上のマククリーン盤でもやっている〈アイ・リメンバー・ユー〉も入ってますので聴き比べたりするのも面白いかも。



ニューヨーク・ララバイ
フランチェスコ・カフィーノ

新しめのも1枚。昨今元氣なイタリアジャズからカフィーノ君を。この録音時で16歳ですか、若いですね。小学生のころから活躍してたそうで凄いなねども。

フランチェスコ・カフィーノ (as)、デビッド・ウィリアムス (b)、ジョー・ファンワース (ds)、デビッド・ヘイゼルトン (p)
2005 年録音

1曲目は〈バードランドの子守歌〉。一生懸命吹いてます!って感じが微笑ましい。でもまだ若いシリーズっ子、もうちょっとやんちゃしても良いんじゃないかとも思いますが真面目なのかな、折り目正しく着実に様々なアプローチ、フレーズを順繰りに次々と詰め込ん

で行きます。しかし16歳でよくここまで吹けるようになるもんですね、ふはー。2曲目からはモンクの〈リフレクション〉に続いて〈水玉模様と月の光〉、〈マイ・ワールド・フレイルム〉、などベタベタな選曲のバラード責めにちよつと眠くなりかけたところでお、5曲目はお国(イタリア)の名曲〈エステーテ〉ですね。11分半と長尺ですが曲全体を大きく捉えた感じのストーリー性あるアドリブ。展開よろしく飽きさせず盛り上がり行って綺麗に納める見事な吹きっぷりに瞳目。その後はまたバラード責めで〈ホワッツ・ニュー〉、7曲目の〈イマジネーション〉はピアノとひたひただからみながら良い感じ。ラストの超っ早〈スピーク・ロウ〉は……お!若さが炸裂してる感じで楽しいですね、行け行け。

春よりも目が醒めていて、夏よりも敏感で、冬は冬々となつていない季節が、秋です。そのせいか、秋の音は冬も平等に、ともクリアに聴こえます。自分を甘やかすのでも守るのでもなく、みずから選んで聴く音が、秋には沢山あると感ぜていきます。地下のライブハウスや密室のクラブにすら、どこから秋の気配は滲み入ってきます。秋の空気に浸された耳を、私たちオーディエンスがその場に持ち込んでいるせいも多分にあるでしょう。それに、オーディエントたちの耳も同じく、秋の空気に浸っているのです。徒に押し付けがましくも派手でもなく、かといって当たり障りなく薄ぼんやりとつかみどころが無い訳でもない。秋には、五感に世界が映えます。頼りない一個の人間の持つ五感が、一年のうちでもっとも対等に世界と渡り合える季節に、何を聴きましよう。さつぱりしたものも、力強いものもいけれど、私は秋に色つばいものを聴きたくありません。音楽すべてにそれなりの色気はあるものの、やつぱり色めいた音や声は欲しくもありません。春のように優しくと勘違いせず、夏のように判断を失うこともなく、冬のように温度優先にもならずいられるのは、やつぱりこの季節のおかげです。自分の肌は空気がよりもし温かいと感じられる。秋の温度。

世界が五感に映える季節に

text by hanao (JJazz.Net) vol.4

は必要だな、と思うのです。ごつた返した試聴マシンの前で数十秒ではなく、きちんと音と出会う時間。JJazz.Netにある音の中の全ての音を網羅しているわけでは勿論ありませんし、誰かにとって堪らなく良い音が、自分の好みではないこともしばしばです。よりどりどりの音を(というには少なからず偏っています)が、気ままに、心行くまで試し、選り、味わえる時間。そんなちよつとした贅沢こそ、秋の夜長にじっくりと行儀と私は思います。知らなかつた音へは、体は自分さへ知らない形で反応をします。それさへスリルのひとつと楽しみますようになれば、秋への準備は万端です。最新の会員番組を無料化したJJazz.Net。癖の強さは人並み以上なのに、中身を曝けちゃうのは、よく考えれば大胆だとも思うのですが、嬉しいニュースであることは間違いありません。ところで、12種類の会員番組は週に3つずつ、ほぼ万遍なく更新されています。つまり、全カテゴリーの最新番組をひとりで聴くには、およそ一ヶ月が必要。それでも、その気長さは決して裏切らないことですよ。ひとつの番組の無料試聴期間は、およそ2日か3日。この時間は、元々なじみのある音を味わうにはあつという間で、全く初めての音を味わうにもあつという間です。ちなみに私はこの秋、さつそお気に入りを見つけた。そして今は、次のお気に入りを探しています。せつちかちかもしれないけれど、食欲の秋、です。欲張っても満たされると知ってしまうと、どんどん求めてしまいます。JJazz.Net は出会いに満ちている代わりに、という方も、寧ろそのせいで、聴く人をどんどん食欲にしようよです。よい音と、よい秋を。

internet radio station
JJazz.Net
Japan Jazz Network

大切なものに出会うために
その人にとって大切な音楽は、忘れられない新しい出会いを作ります。
大切な音楽。大切な人。大切な想い。

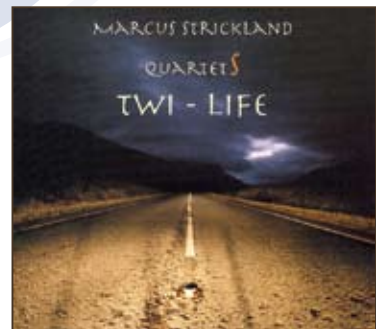
最新会員番組が無料に!
"AVENUE"毎月2回更新!

INTERVIEW - COMING KENISHII, PHAROAH SANDERS...
LIVE - COMING 清水靖晃、梅津和時KIKI BAND...

月額1,050円の会員サービスでは
約4ヶ月分のアーカイブ、常時約500曲が聴き放題

www.jjazz.net

刺激を求めてアメリカ回帰



Marcus Strickland Quartets
Twi-Life (Strick Muzik)

もう今年も残すところ2ヶ月あまり、振り返ると和ジャズ、欧ジャズ、リイシュー豊作の1年だった。特に Vocalion に代表されるプリティッシュ・ジャズのパワーには脳天を打ち抜かれた感じだ。やや趣味に合わないものもあったが、かなりの数を購入した。

しかし新譜は? という手に取るものはアメリカのミュージシャンばかりだったような気がする。数ヶ月前ディスクユニオン・ジャズ館全店で『Fresh Sound New Talent 特集』が展開された。店員が選んだ究極の数10タイトルが一緒に店頭に並んだ。Fresh Sound New Talent はスペインのレーベルだが NY で勢いのあるミュージシャンの録音を積極的に行なっているレーベルだ。改めてその作品群を眺めると実にカラフルで個性的な作品が多い。個性が強い分、好き嫌いもハッキリする。大当たりもあればその逆もある。そんななかでマーカス・トリックランドの参加した作品は当たりが多かった。今ニューヨークのジャズ・シーンで最も熱い視線を浴びているサクソ奏者の一人。豪快でいて繊細、しなやかでいて強靱、まろやかでいてシャープ。聴くたびにさまざまな表情をみせる。27歳にしてすでに風格さえ感じさせる。

この作品は自らの設立したレーベルの第一弾。細やかな感性を思わせるメロディセンスはよりブラッシュアップされている。不思議な強さと優しさ、独特の体温にじびれる一枚。

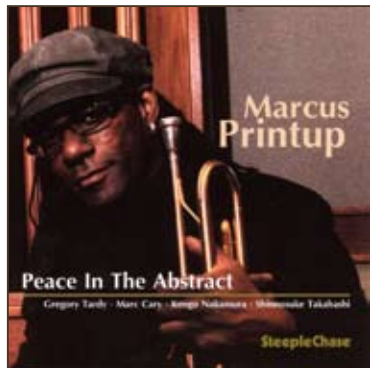
(大河内善宏)



Derrick Gardner
Slim Goodie (Impact)

理想は、基本的に5人編成でフロントはトランペット。この「Slim Goodie」は、トランペッター・リーダーで、しかも基本形よりもふたりも多いことでより喜ばしい7人編成だ。テクニクもしっかりしている。デリック・ガードナーは、ミシガン州立大学 (MSU) でジャズ・トランペットをお教への助教授さまであらせられる。ミシガンといえばデトロイト。デトロイトといえばフォードや GM に代表される自動車産業発祥の地。音楽ファンであれば、その昔、一世風靡したアメリカン・ポップスの代名詞、モータウン・サウンドをイメージするもの。創業者ベリー・ゴードン Jr. は、あのスティーヴィー・ワンダーやダイアナ・ロスといったスターを送り出し、当時、黒人ながら成功をおさめた、いわばアメリカン・ドリームの実現者。すぐアメリカ的だ。そして現在、地元大学講師が己のバンドで、音楽的エキスが染み込んだ豊饒な地に根ざした新興レーベル、IMPACTJAZZ からリリース。ドリームを求めるといふより、もうすでに夢をつかんだかとおもほほど完成されたサウンド。モータウンも大半は LA 録音という逸話があるのもアメリカらしいが、この作品も NY のスタジオ録音というから微笑ましい。しかし、どこで録音してもレーベルのサウンド・カラーが少なからず影響することを考えると、レーベルの所在地こそ重要なのだ。ミシガン発の理想的なアメリカ作品、聴けば納得する「熱い」アメリカン・サウンド。ことごとく琴線にふれるメロディとリズム。今、アメリカが熱い。

(前泊正人)



Marcus Printup
Peace In The Abstract (SteepleChase)

ジャズをルーツで語るつもりはない。ましてや「...であるべきだ」などという論争に加わる気はまったくない。ただジャズには確かに色があり、その色の空気を伴っている。初めての街に「空気」を感じ「色」とともに記憶にとどめるように。そして、その色を感じてアルバムを好きになることがある。特に最初の曲が最初の音を発する瞬間にさっとスクリーンの場面が展開するように自分の感覚がプレイヤーの色に染められるとき、これから過ごすであろう満ち足りた時間を確信し、ソファにもう一度腰を深く埋める。

SteepleChase での初のリーダー作となる本作で Marcus Printup はコンポーザーとしての実力を見せつける。何気ない立ち姿だけで女の気持ちを惹きつけるジゴロのようにすっと入るイントロが心を深夜のニューヨークへと誘う。バカ騒ぎのパーティも終わり、どこか取り残されたような気持ちに折り合いがつかず、ふと立ち寄ったバーで濁った記憶を一瞬で覚醒させるような音色。音の立ち位置がひたすらこい。テナーもピアノもあくまで鋭角に Printup のアプローチに同調する。そしてベースとドラムの日本人のリズムセクションは Printup の色を鮮やかに際立たせる。

かつて憧れたアメリカはどんどん色褪せて、ジャズにおいても少し距離を置くようになっていた。皮肉なことに極東の地で戦いの後、道を求めて彷徨った時期のアメリカのほうが魅力的だった。いま五年の時を経て少し脳み始めたアメリカがそこにある。これから彼らがどのように進んでいくのか、少し付き合ってみよう。

(白澤茂稔)

ソロよりも、ハーモニー感が好きなんです。

ゲスト
かまやつひろし



お! よく見つかったね〜と、声を出さんばかりにCDを手にとってしげしげ見つめるかまやつさんに、そのCDを手に入れるまでのスリリングな経緯を伝えた。取材の3日前に伝えられた「コンテ・カンドリとメイナード・ファーガソン在籍時代のスタン・ケントン楽団なら何でも」という“この一曲”を投げかけられた編集部。ネットで検索出来たCDはたった一枚、それもAmazonに在庫が一枚しかない。Amazonは24時間以内の発送を謳っているけれど、それでは手元に間に合わない。ジャズ・マニアの知人に電話で相談すると、2時間後に都内某中古レコード店に1枚だけ出ていることが判明した。無事に手に入れることが出来た『KENTON in HI-FI』を聞きながらインタビューは始まった。

おやじはジャズ歌手だけど、僕がジャズを教えてもらって一番影響を受けたのは僕の伯父さん、つまり森山良子さんのお父さんの森山久さん。森山さんは素晴らしいトランペッターで、僕は子どもの頃、森山さんと一緒に暮らしていたことがあるので、伯父さんはジャズ教室をやっていたから、ぼくたちは遊びながらも毎日色んな人の演奏するジャズや歌を耳にすることが出来たんです。おやじも親戚もそんな感じの中で育ったから、ジャズをいつから聞き始めたかというのが分からない。環境がジャズだったからね。

伯父さんのトランペットがかっこいいので、トランペットに憧れて自分でも吹き始めたんです。中学の時に「情熱の協奏曲」というカーク・ダグラスの映画を見てトランペットに憧れたんですが、あまりトランペットの才能はないことが分かったので、すぐに演奏は辞めました。チェット・ベイカーも好きだったので、ギターを持ったチェット・ベイカーになれないかと本気に思っていました。さしずめ、マイケル・フランクスってどこかな。結局ジャズは諦めたんです。ジャズの詞のニュアンスは難しいし、ポップスに比べて敷居が高かったです。それから、カントリー・ウエスタンを真剣にやり始めました。米軍のキャンプ巡りの仕事は随分やりました。新宿の南口に集まると、人集めの人が来るんですよ、まるで、日雇い労働者とおんなじ。どこどこ地区にト

ランベト三名とか、サクソ吹ける奴がいるか? とか呼ばれて集まって、FEN で仕入れた曲をその場で初めて合った人たちと演奏するんです。

マイルスやコルトレーンも好きですけど、ソロよりもハーモニー感、特に、フル・バンドのコード感とかハーモニー感が好きなんだよね。歌にしてもハイ・ローズとかフォーフレッシュメンだし、演奏家にしても、チェット・ベイカーとかジェリー・マリガンなんかの白人がきっちり仕上げたジャズが好きで、特にビッグ・バンドのハイ・ノートがとても好きなんです。昔はハイ・ノートを出せるトランペッターはギャラが良かったそうなんですが、コンテ・カンドリもファーガソンもハイ・ノートが凄いでしょ。だから、この二人が演奏しているケントン楽団は最高なんですよ。

子どもの頃初めてスタン・ケントンの演奏を聞いた時に、どんどん色んな音をぶつけて不協和音を出すのが、とても新しいサウンドに聞こえたんです。そういう経験は、僕にとってはその後のビートルズにつながるんです。

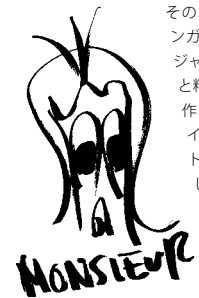
たとえば、黒人そのもののブルースよりも、それがイギリスに渡って生まれたイギリスの白人達を通して出てきたブルースが好きなのとおんなじ感覚で、ジャンルはどうあれ、どこか涼しげなサウンドというのが僕は好きなんです。

編集協力:ピンポイント

かまやつ・ひろし

1939年、東京生まれ。父親は日本ジャズ界の草分け、ティープ釜淵。幼少時代よりジャズなどの音楽に触れながら育ち、青学高等部在学中から米軍キャンプでカントリー&ウエスタンを歌う。50年代に「小坂一也とワゴンマスターズ」に加入し、プロデビュー。その後60年代頭にテイチクより3人ひろしの一人としてソロデビューも。アメリカへの留学を経て、64年、旧友の田辺昭知率いるザ・スパイダースのメンバーとして「パンパンパン」「あの時君は若かった」など不朽の名作を残す。70年解散後はソロとして、73年に吉田拓郎と「シンシア」、75年には「我が良き友よ」が大ヒット。

その後も、セッションシンガーとして、あらゆるジャンルのアーティストと精神的に活躍。最新作として avex よりブライアン・ジョーンズのトリビュート盤に参加している。



e-onkyo.com music store

秋吉敏子 音楽生活60周年記念企画

オーディオメーカーのONKYOが運営する高品質音楽配信サイト [e-onkyo music store]と日本クラウンの共同企画



指先から鍵盤へ、彼女が込める想いまで聴こえてくるようだ。

こだわりの音質 24bit96kHz で聴く、日本が世界に誇るジャズピアニスト 秋吉敏子の世界

高品質配信実現のために、レコーディングエンジニア・行方洋一氏によるスペシャルチューン! 今回の配信のために特別にアソートされたベストセレクションを含む13タイトルを順次配信!

HD高品質音楽配信サイト

e-onkyo music store http://music.e-onkyo.com/

【MOONKSとは?】 6人のメンバーの頭文字からなるMOONKS。「批評」ではなく、ただ「好き」を唯一の基準に活動する「ジャズ鑑賞集団」。2004年9月のフリーペーパー「MOONKS Must150」はCD時代の金字塔的ガイドブックとして購入者に圧倒的に支持された。『ジャズ批評』のCDレビューに注目。

親しんでは、 ときどき、ながして。



連載 vol.10

text by 小沼純一

On My Way To You リーゲモル・グスタフソン



- 01 . The Summer Knows
- 02 . Windmills Of Your Mind
- 03 . How Do You Keep The Music Playing
- 04 . After The Rain
- 05 . Love Makes The Changes
- 06 . Once Upon A Summertime
- 07 . Where's The Love
- 08 . On My Way To You
- 09 . Watch What Happens
- 10 . The Way He Makes Me Feel
- 11 . What Are You Doing The Rest Of Your Life
- 12 . One At A Time
- 13 . I Was Born In Love With You
- 14 . You Must Believe In Spring
- 15 . La Valse Des Lilas

[パーソナル]
Rigmor Gustafsson - vocals
Jonas Östholm - grand piano, Hammond B3
Christian Sperring - double bass
Johan Löfcrantz-Ramsay - drums, percussion
Daniel Tilling - grand piano, Wurliitzer
Thobias Gabriellsson - Fender bass
Martin Höper - double bass
Jonas Holgersson - drums

Special Guests:
Tino Derado - accordion, piano solo
Magnum Coltrane Price - vocals
Magnus Lindgren - tenor sax, baritone sax
Nils Landgren - trombone

ACT
2006/1/20 Release

手にはいつからすでに何か月か経っている。つれあいが仕事でパリに行き、たまたま目にしたので買ったという。何の先入観もなく、曲を気に入っていたわけでもない。ミシェル・ルグランの曲ばかり集めていたというのは、聴き始めて初めて気づいた。ましてや、前作がデオニス・ワーウィックへのトリビュート兼ねたパート・バカラック曲集だなんて知らなかったし、残念ながら、いまだに買いに行っていない。バカラックとルグランの曲をそれぞれアルバムに入れてあるなんて、まったく、オレのための歌手のようではないか!と思いつつ、とりあえずルグラン曲集だけで満足してしまっている。もちろん気にはする。でも、アツクもありがたて他のアルバムもすぐに聴いて、というより、なんとはなしにだらだらと馴れて、慣れて、親しんで、ときどき、ふ、つと部屋にながして、というほうが相応しい。

スウェーデンのシンガー、リーゲモル・グスタフソンの『On My Way To You』。けっして大きな編成ではない。アコースティックだったりエレキトリックだったりするが、基本的には数人のコンボ。アコーディオンや Hammond・オルガンが色を添え、プロデューサーのニルス・ラングレンがトロンボーンを吹いたり、ちょっとしたアレンジの妙味が全体にちりばめられている。言い回しとしては、そう、スパイスがきいている、というより、フレイヴァーが生きている、というのが相応しいか。

リーゲモル、生まれば66年4月、スウェーデン、ヴェルムスコグ。けして大きくはない町のような。音楽学校からストックホルムの王立音楽院に通い、ギターからヴォーカル、さらに作曲も学んだ。在学中から活発な活動をおこなう。そして90年代は一度ニューヨークに拠点を移し、後には再度故国に戻って、母校のジャズ・ヴォーカルの教授にもなっている。また幾つものフェスティバルに出演して徐々に広く知られてゆくようになった。

「北欧」と一括りにする雑雑さを充分承知しながら、ノルウェーのソルヴェイグ・シュレタイエル(ほんとうは「スールヴェイグ」と読むらしい)とか、ベアテ・レグとマリユス・レクシヨウのユニット、ピーディー・ベルとか、デンマークのキヨロライン・ヘンダーソンとか、個人的に、何か女性の声に惹かれてしまう。リーゲモルも同様だ。90年代から特にクラブ系サウンドとともに「北欧」の注目度はアップしたが、しかしまあ、60年代のドルフィーのライヴから、ヴィトウスからビヨルンスタ、ガルバレク、スファン、ペデルセンといくらでも有名なアーティストはいたのであった。でも、ヴォーカルで特にひっかかることは、これまであまりなかった。その意味では自分なりに少し驚いてさえいる(アンナ・カリーナは?などと問いつめないうちに)。

収録されているのは『エルブールの雨傘』『夏のおもいで』といった映画で多くのひとに親しまれたルグランのナンバー。ただ、ルグランは、どうも、幾つかの曲ばかりが妙に有名になってしまい、それ以外にもいいのがあるのに、いまひとつ認知度が低いという気がしないでもない。まあ、作曲家によってはいろいろ仕事をしているし、どれもそこそこなのだが、誰でもが知っている曲はない、ということもあるので、どちらがいいということもないけれど、また、もともとフランス語の曲がフランス語で歌われていないのを不満に思うたりするということは個人的にあるにしても、さして問題ではない。英語だというのに、如何にも「アメリカ語」の感触はない。何と言ったらいいか、アメリカの言葉のくさみや深みがない。もつとニューヨークにひびく。それは声そのものや節回しでもそう。もしかすると、ひとによつては、ジャズではないと言いかもしれない。だが、それがいいし、それでいいのだ。

ここまで書いて、そうだ、やっぱりバカラックをうたったアルバム、探そうかなとつよく思い始めているのであった。



Impression of Tristano

ハーレム・ノクターン

第六回

先月はジャズ・ギターを習い始めたはいいが腱鞘炎になってしまい、ギターをやめるところまででしたが、その続きはいずれ気が向いた時にでも書きます(?)。

9月はマシュマロレコードの上三雄さんをお願いして平井バンドのデモ音源を録音したり、初めてピットインの夜の部に出演したりと慌しい月でした。昼の部の時よりもお客さんが少ないんじゃないだろうかと心配していたのですが、雨に

しかしトリストアーノ派のサウンドは、他のジャズに比べてそんなに異様なのでしょうか?

僕のバンドでも時々演奏しているあるミュージシャンが、以前、仕事後のホステスを自宅まで送り届けるバイト(時間が深夜だし、自分の車が使えないので、これをやってるミュージシャンは多いらしい)をしていたのですが、車の中でリー・コニッツのCD『Subconscious-Lee』を流

アーはCD『Plectrist』のライナーで、「自分のベストプレイのレコーディングはサム・テイラーのアルバム」と語っています。

ジャズを聴き始めるころはたいがい誰しも、細かいことを気にせず色々なものを聴いていますが、聴きこんで好みははっきりしてくると、だんだんスタイル、年代、人種、国籍などでジャズを細かく分類し、好きだの嫌いなの言うようになることが多いようです(「○○は〜年までしか認めない」…のように一人のミュージシャンのキャリアを年代別に細かく区切ることも)。しかしながら、そういった日本人ならではの重箱の隅をつつくような執拗さが、ディスコグラフィの充実やマニアックな廃盤のCD復刻に繋がっていることも事実だと思います。僕も今のバンドを始めるにあたって、資料として廃盤レコードを探しまくった経験があるので次回はその辺の話を。

(以下次号)



もかかわらず20人以上の方にご来場いただき、これも jazztoday 連載の効果かと思っていたところ、9/26の吉祥寺MEGのライブではお客さんが一人で、いきなり現実に引き戻されました。

さてレコーディングの休憩中に上不さんいわく、「今この手の音楽(トリストアーノ系のクールサウンド)を聴く人は、たぶんフリー聴く人より少ないんじゃないか」という事でした。確かにトリストアーノの音楽は、ハード・バップや歌物スタンダードが好きな人には変てこなサウンドに聴こえ、フリーなど激しいものが好きな人には淡々とした、つまらないものに聴こえるようです(僕はどちらの要素も含んだ音楽だと思っていますが…)。

していたところ、同乗していたホステスさんが、「やだー、なんかラブホにいるみたい」とのたまったそうです(…)。TVのバラエティ番組等でのエロいシーンのBGMにはサム・テイラーの〈ハーレム・ノクターン〉がよく使われますが、たぶん彼女に限らず大多数の日本人はサックスの音やジャズに対してそのような印象をもっているのではないのでしょうか(僕もそうでした)。特にジャズ・ファンでない人からみればパーカーもコルトレンもコニッツもサム・テイラーも、おそろしく似たようなものに聴こえるのだと思います(サム・テイラーに限らずムード・ミュージックは個人的に好きなので、アル・カイオラ、トニー・モットーラ等のムード・ギターのレコードも一時期集めていました)。ちなみに、トリストアーノ派のギタリスト、ビリー・パウ

LIVE スケジュール

● 10/20(金) pm 2:30
新宿ピットイン(昼) ¥1,300

平井庸一(G)、都築猛(P)、
増田ひろみ(As)、橋爪亮督(Ts)、
海道雄高、蛸子健太郎(B)、竹下宗男(Dr)

久々にメンバーが揃いました。

● 毎週金曜日 pm 7:30
六本木 FIRST STAGE(03-3405-1910)
¥2,000(ドリンク付)

ジャムセッション進行



筆者(後列右)とバンドの面々

【ひらい・よういち】
…ギター奏者/1970年東京生まれ。大学時代に高嶋宏にジャズ・ギターを師事する。キャバレーのハコバンでの修行を経てライブ活動を開始。使用楽器は、オールドのGibson ES-125と、Gibson L-7c(シャウウッドギターで改造中)。



EXPANSION

[re:jazz]

INFRACOM! 大人気シリーズ、アコースティック・ジャズ・バンド [re:jazz] の最新作が完成! クラブ・サウンドをジャズへと生演奏し、斬新な企画で大きな話題となった [re:jazz] が、大ヒット作『Point Of View』から2年振りに、第3弾を発表!

01. [re:jazz] Theme
02. People Hold On feat. Tobias Kremer Big Band
03. Not About Me / 04. Back Home feat. Ack van Rooyen
05. Promised Land / 06. Too Many Holes feat. Ernesto
07. Rock It / 08. Steved
09. Finally feat. Ack van Rooyen
10. Gabrielle feat. Alice Russell / 11. Return to Damara
12. Plastic Dreams

INFRACOM!
NBIP-5032
¥2,500 (税込)

2006/10/21
Release



ア・プリー・アン・ヴァンドレディ

タマス・ウェルズ

すべての痛みを除去する、この世で最も純潔な歌声。「ビューティフル・ソングス」とは、本作のためにある言葉だ。

01. From Prying Plans Into The Fire / 02. Valder Fields
03. Vendredi / 04. Lichen & Bees
05. Ves, Virginia, There Is A Ruling Class
06. The Opportunity Fair / 07. Valour
08. The Telemarketer Resignation
09. I'm Sorry That The Kitchen Is On Fire
10. Melon Street Book Club
11. Open The Blinds

Inpartmint
IPM-8009
¥2,200 (税込)

2006/10/15
Release



伊勢

古野光昭

日本ベース界の真打ち登場! 実力 No.1 ベース・プレイヤー、5年ぶりの新作発表。トップ・プレイヤーを従え待望の2nd アルバム!!

01. MY BACK PAGE / 02. BE MY LOVE / 03. SHŪTING
04. AVE MARIA / 05. SOFTLY AS IN A MORNING SUNRISE
06. NORWEGIAN WOOD / 08. MINOR MARCH
09. OBLIVION / 10. EXPRESSION
11. HOMAGE TO FURUSATO

M&I Jazz
MYCJ-30402
¥3,000 (税込)

2006/10/18
Release

Mitsuaki Furuno (b) / Akira Ishii (p)
Masahiko Osaka (ds) on 2,3,5,6&7
Masanori Ando (ds) on 1,4,8&10
Taku Akiyama (as) 5,7,8&10



Live At Royal Festival Hall

デヴィッド・アクセルロッド

ヒップホップのサウンドに影響を与えた、伝説の作曲家 / アレンジャー / プロデューサーデヴィッド・アクセルロッド初のライブ映像が「愛蔵版」DVD+CDセットで登場!

Paint It Black / The Edge, Song Of Innocence
Holy Are You / So Low / Tensity / Holy Thursday / Urizen
The Sick Rose / London / The Human Abstract / Smile
Norwegian Wood (Spanish Wood)

Jim Hart (Vibes) / Colin McCann (Percussion)
Ali Friend (Bass) / Tim Weller (Drums)
Ingrid Laubrock (Tenor Sax) / Colin McCann (Timbales)
Nick Cartledge (Flute) / James Allsop (Tenor Sax)
Nigel Price (Guitar)・・・他

2006/11/24
Release

N/O releasing
NODH-00029
¥4,830 (税込)



ボニータ

マルシア・ロペス

ヒット作『LP』から2年、ブラジリアン・クール & ビューティフル、サンパウロの宝石マルシア・ロペス待望のセカンドアルバムついに発売! エレガントでナチュラル、カエターノ・ヴェローゾが賛美する歌声が紡ぐ美しい旋律。その奥で静かに、優しく脈打つサンバ。。。ブラジルと欧米文化の融合点、先鋭都市サンパウロを写し出す、洗練を極めたアーバン・ブラジリアン。

01. E O MUNDO NAO SE ACABOU / 02. LABIA
03. JOANA FRANCESA / 04. SABADO EM COPACABANA
05. MOON RIVER / 06. SHE'S LEAVING HOME / 07. BONITA
08. THE NEARNESS OF YOU / 09. SABIA
10. QUEM TE VIU, QUEM TE VE / 11. BOA NOITE, AMOR
12. CARACAO VAGABUNDO *
13. BONECA DE PIXE *
* BONUS TRACKS

RIP CURL RECORDINGS
RCIP-0091
¥2,500 (税込)

2006/10/5
Release



ペインテッド e.p.

ミアオウ

和製ポストロックシーンの中において、メロディーセンスと憂いを帯びたサウンドでひととき存在感を放つ3人組。ギター、ドラム、ベース、といったロックの基本となる楽器を中心にエレクトロニクス、シンセサイザーを導入したサウンドは新しい形を提示しながらも、ずんなり耳に入ってくる抜群のメロディーラインはポストロックや日本人バンドといった枠を超えた独自の世界を作っている。サウンドエンジニアにはシーンの代表格とも言える toe の美濃氏が全面的にサポート。標的を世界にとらえ、満を持してリリースされる大作!

01. we lost it / 02. scene of the sunrise
03. anything goes / 04. grasslands(revised)
05. airship / 06. future pavilion (millimetrik remix)
07. dante (epic45 remix) / 08. on a sunday (qua remix)

Thomason Sounds
TSIP-2016
¥1,500 (税込)

2006/9/17
Release



バット・ビューティフル ~シェイズ・オブ・アート

ジョージ・ケイブルス・トリオ

アート・ペッパーの想い出! ケイブルス・ムラーツ、ペッパーの歴史的瞬間を共有した二人がレイス・ナッシュを加えて織りなす名品!!

01. My Ideal / 02. But Beautiful
03. Smoke Gets In Your Eyes / 04. Besame Mucho
05. My One And Only Love / 06. Star Eyes
07. Looking For The Light / 08. Tete A Tete
09. Somewhere Over The Rainbow
10. Gone With The Wind

M&I Jazz
MYCJ-30401
¥2,800 (税込)

2006/10/18
Release

George Cables (p) / George Mraz (b) / Lewis Nash (ds)



ホーム・ビヨンド・ザ・クラウド

ハクエイ・キム・トリオ

超有名スタンダード曲「ユード・ビー・ソー・ナイス・トゥー・カム・ホーム・トゥー」で初々端からのけぞって下さい。この凄まじくも、優しいピアノに酔いしれ、そして幸せな気持ちになってください。

01. ユード・ビー・ソー・ナイス・トゥー・カム・ホーム・トゥー (コル・ポーター)
02. ハニー・サックル・ローズ (ファッツ・ウォーラー)
03. ニュータウン (ハクエイ・キム)
04. ザ・マーケット・パート1 (ハクエイ・キム)
05. ザ・マーケット・パート2 (ハクエイ・キム)
06. キャラバン (デューク・エリントン)
07. ザ・マーケット・パート3 (ハクエイ・キム)
08. ホーム・ビヨンド・ザ・クラウド (ハクエイ・キム)

ハクエイ・キム (p) / ベン・ウェイブルズ (b)
ティブ・グッドマン (ds)

DIW
DIW-633
¥2,625 (税込)

2006/10/20
Release



フォーメーション

沢田駿吾


これぞ「新主流派」和ジャズ。ショーターに始まりショーターに終わる硬派な1枚。サバビアン・カフェ系の演奏でも人気を集める名ギタリストが菊地秀行と徳山陽を迎え、ハードにモダン・ジャズを突っ走る! (原田和典)

01. フット・プリンツ / 02. ノーティ・ドギー
03. 恋の終列車 / 04. フォーメーション
05. ハウ・ディー・イズ・ジ・オーシャン
06. アンラッキー・ガイ
07. チーフ・クレイジー・ホース

沢田駿吾 (g) / 菊地秀行 (ts,fl) / 徳山陽 (p)
滝谷博典 (b) 鈴木孝広 (as)

THINK!
THCD-032
¥2,520 (税込)

2006/10/20
Release



スウィート・トーカー (1963~2005)

カーリン・クローグ

北欧を代表する女性シンガー、カーリン・クローグの40年に及ぶ音楽活動の集大成とも言える2枚組ベスト・アルバム。今回が初CD化となるデビュー・シングルから最新作まで、貴重な音源や名演を詰め込んだお得盤。若クラブリスナーからコアなジャズ・ファンまで幅広くフォローする究極のコンピレーション!

【CD1】01. ユード・ベター・ラヴ・ミー / 02. ナイス・ワーク・イフ・ユー・キャン・ゲット・イット / 03. リボン・オブ・サンド / 04. カント・マイ / 05. ソウル・アイズ / 06. シャイニー・ストッキングス / 07. ラ・カラタ / 08. いつの頃から / 09. レスターズ・ハッピー / 10. ミニマム・オブ・ラヴ / 11. ブルース・イン・マイ・ハート / 12. スター・ダスト / 13. ジャスト・ワン・オブ・ソーズ・シン / 14. ホエア・フランコ・フライ / 15. ブレイク・オブ・デイ・イン・モルデ

【CD2】01. レインドロップス、レインドロップス / 02. エンブ・ティ・ストリート / 03. サム・ワン・トゥ・ウッチ・オヴ・グー・ミー / 04. ユー・マス・ビリーヴ・イン・スプリング / 05. ノー・サン・サン / 06. アローン・ソング / 07. フル・サーズ / 08. アル・ワイト・フォーユー / 09. マイ・マズ・ズ・コン・ノウ / 10. アスク・コアフル・ホワイ / 11. グル・ミー・サウ・デイ / 12. スウィート・トーカー / 13. ウォーター・メロン・マン / 14. サン・カ・マン・ボップ・プレーター / 15. ウォーター・メロン・マン (remix) *bonus tracks

fab. MZCQ-119/120
¥3,200 (税込)

2006/10/25
Release

カーリン・クローグ (vo)・・・他



バラッズ

エンリコ・ビエラマンツィ

PJB トリオによるエンリコ最新作は全編バラード・ナンバー。溢れ出て止まらない美旋律の空間。日本盤ボーナス・トラック「ガラスの部屋」収録。

01. 君に恋して / 02. ジーズ・フーリッシュ・シンギング
03. ホエン・アイ・シンク・オブ・ユー
04. ア・フラー・イズ・ア・ラヴ・ソング
05. ハート・オブ・ア・チャイルド / 06. サン・デイ
07. ソート / 08. ナイト・アフター・ナイト
09. ホエン・オール・ワズ・チェット / 10. ミラダス
11. カピリアの夢 / 12. ガラスの部屋※
※日本盤ボーナス・トラック

エンリコ・ビエラマンツィ (p) / マーク・ジョンソン (b)
ジョーイ・パロン (ds)

オーマガトキ
OMCZ-1022
¥2,625 (税込)

2006/10/18
Release



ふ、ふ、ふ、

一噌幸弘・しらせ LIVE

「能管のバッセージをヴァイオリンが追っかけ、タブラーと太鼓がユニゾンで被ってくる。痛むかのようなラメンコ・ギターのパッキングに、速さをより際立たせるブレイク」

01. 空乱 12 拍子 / 02. イトメ / 03. 海こえて
04. ふ、ふ、ふ、take-2 / 05. おかゆ / 06. ISSO'S ジーグ
07. なまずの幼稚園 / 08. ふ、ふ、ふ、take-1

一噌幸弘 (能管、篠笛、田楽笛、リコーダー)
壺井彰久 (ヴァイオリン) / 高木潤一 (ギター)
吉見征樹 (タブラ) / 茂戸藤浩司 (太鼓)

tohyohyo
tohyohyo-001
¥3,000 (税込)

2006/10/1
Release



木曾

宮沢昭

36年間、ベールに包まれていた、ジャパニーズ・ジャズ・スピリチュアル作品の最高峰と謳われる幻の名作「木曾」。20bit K2 デジタル・リマスターを施し、ついにその全貌が明らかに!! 初 CD 化!!

01. 木曾
02. 浅間
03. 白馬
04. 飛騨

宮沢昭 (ts,fl)
佐藤九彦 (p)
荒川康男 (b)
森山威男 (ds)

THINK!
THCD-031
¥2,520 (税込)

2006/10/20
Release



トゥゲザー・アゲイン

カーリン・クローグ&スティヴ・キューン

運命の再会
1974年「ユード・ビー・フライイング」、2002年「ニューヨーク・モーメンツ」に続く待望の共演作品。秋深いオースロでの再会から生まれた美しくも心温まるダイアローグ。まさにこの二人しか成し得なかった奇蹟のデュオ・アルバム!

01. トント・レット・ザ・サン・キャッチ・ユー・クライング
02. アイ・ソート・アバウト・ユー / 03. アルフィー
04. タイム・オン・マイ・ハムズ
05. ウィル・ビー・トゥゲザー・アゲイン
06. ウィー・ベイビー・ブルース
07. レイジー・アフターヌーン / 08. タイム・アフター・タイム
09. シム / 10. パーティ・イズ・オーヴァー

fab.
MZCF-1105
¥2,520 (税込)

2006/10/25
Release

カーリン・クローグ (vo)
スティヴ・キューン (p)



アンコール

アントニオ・ファラオ

メロディアスに、そして爽快に疾走する切れ味抜群のピアノ。2004年の傑作盤が遂に国内発売。

01. コスベッロ / 02. アンコール
03. サウ・イツ・ディファレント / 04. アイム・ロスト
05. ウェラ / 06. スリー / 07. デテ
08. ダブル・ライフ・アンド・モア / 09. シルヴァン
10. ニューズ・フロム・ヨーロッパ / 11. ジャパン

アントニオ・ファラオ (p) / マーチン・ヤコノフスキ (b)
ヤン・テルツィック (ds)

オーマガトキ
OMCZ-1021
¥2,625 (税込)

2006/10/18
Release



スタンド・アップ・ブリーズ!!

スフォーク

NY在住のベーシスト塩田哲嗣(シオタ・ノリヒデ)と豪華ゲスト陣NARGO & 北原雅彦 & 茂木欣一(東京スカパラダイスオーケストラ)、太田 剣、石成正人、クリヤマコトら参加のグルーヴ・エンターテイメント SFKUANK!! 待望のセカンド・アルバム!!

01. イフ・アイ・ワー・ナーゴ / 02. アトラクティヴ・ヴァンプ / 03. エフ・イー・エヌ / 04. レモンティーン / 05. トン・ブウ / 06. エクスプレッション!! / 07. ダブル・タッチ / 08. ダ・ダ・ダンス!! / 09. ワン・モア・シング / 10. 愛と欲望の惑星 / 11. ホーリング・インフェルノ・ペーハー・シックスティナイン / 12. ノ・セウ・フルトラール / 13. ダ・ダ・ダンス!! (ヒット・ザ・フロア) / フィーチャリング・タイガー / 14. ワン・モア・シング・フィーチャリング・ウォーカル・ベイ・シュー / 15. ノ・セウ・フルトラール・フィーチャリング・ウォーカル・サイケンジ

塩田哲嗣 (b) / NARGO (tp) / 北原雅彦 (t b) / 太田 剣 (sax) / クリヤマコト (k b) / 茂木欣一 (ds) / 佐野康夫 (ds) / 石成正人 (g) / Saigenji (vo) / TIGER (vo) / BeiXu (vo) / Tom Armstrong (perc)

2006/10/18 Release

Leafage Jazz PCCY-30099 ¥2,940 (税込)



夜も昼も

浜田真理子

プロデューサーに“大友良英”、レコーディングエンジニアに“ZAK”を迎えた、浜田真理子待望の新作がついに完成! これまでのピアノ一本の弾き語り、一曲毎に異なる極め小さい楽器編成を加え、各々の音が耳事に溶け合い奏でる極上のアンサンブルを実現させる決定盤に仕上がった。

01. 十五夜 / 02. スプーン / 03. 存在 / 04. 風の音 / 05. 旅路 06. 埋み火のブルース / 07. 今日 / 08. 恋ころろ 09. 爪紅のワルツ / 10. Someday soon / 11. 胸の小箱

浜田真理子 (vo,p) / 四家卯大 (cello) 松永孝義 (contrabass) 江藤直子 (glockenspiel) 金子重治 (gut g) / 秋岡敬 (bandolin) 小川紀美代 (bandneon) / 五十嵐一生 (trumpet) 中牟礼貞則 (electric g) / 水谷浩章 (contrabass) 青木タイセイ (organ,trombone) / 栗原正己 (electric b) 大友良英 (acoustic g)

2006/11/4 Release

美音堂 SFS-014 ¥2,625 (税込)



古本屋のワルツ

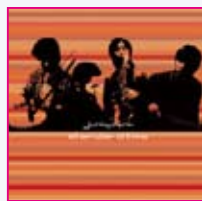
黒船レディと銀星楽団

ノスタルジックな文化の薫り漂う、神田神保町発! 中年の男性が主人公という珍しいコンセプトでつくられた、「音なくした本を探して古本屋をたずねる・・・」という若い頃への郷愁を誘う、どこか懐かしさと夢に満ちた大人のファンタジーを謳うタイトル曲『古本屋のワルツ』をはじめ、古きよきファンタスティックなジャズ・ソング『上海』など、新聞や雑誌で話題の『黒船レディと銀星楽団』遂にデビュー!

01. 古本屋のワルツ / 02. moon&mars / 04. 海はもうすぐ 05. Pâtisserie / 06. すずの兵隊 / 07. 鳥になりたい 08. 上海 / 09. 桃の花

2006/10/18 Release

波に月レコード NMT-601 ¥2,000 (税込)



スタンダードタイム

ジャンキー・ファンク

世界初! 5連符のシャッフル、7連符のサンバジャンキー・ファンクの『さわやかで、難解で、笑える』ヘン拍子ジャズスタンダードアルバム

01. St.Thomas / 02. All Blues / 03. Matamata / 05. Samba De Orfeu / 06. Yolero / 07. Day By Day / 08. U.F.O / 09. Summertime / 10. Funky Junk / 11. Giant Steps / 12. Super Ending / 13. Take The "A" Train

カッパレックス 17号【松井秋彦】(p) フラフープじろちゃん【岡田治郎】(b) おびよびよん【音川英二】(sax) i 徳 nano【嶋村一徳】(ds)

2006/11/27 Release

VME DAME-7777 ¥2,800 (税込)



マーク・ホイットフィールド・アンド・ザ・グルーヴ・マスターズ

マーク・ホイットフィールド

この記録は時代を超越してジャズの真髄を伝えていきます。本当のジャズの心が曖昧になっている今日この頃、この録音が本当のジャズを求めているあなたの心に必ずや訴えかけることでしょう。米国現在最強オルガン・ギター・トリオ! ロニー・スミスの4ビートは必聴。このグルーヴ感! このドライブ感!

01. The Whip / 02. Bye Bye Blackbird 03. Willow Weep For Me / 04. OGD (Road Song) 05. Going Through Changes / 06. Impressions 07. Midnight Sun / What's New

Mark Whitfield (g) Dr. Lonnie Smith (Or g) Winard Harper (dr)

2006/9/21 Release

VEGA RECORDS ART-1030 ¥2,800 (税込)



ライヴ

マイケル・ランドウ

マイケル・ランドウ最新アルバムは2枚組みのライブ盤日本盤の特典は、日本語ラーナーノーツと未発表写真

[DISC1] 01. Wprried life Blues / 02. The Sun / 03. APeaceful Ride 04. Underwear / 05. 6/8 Blues / 06. Born in the rain [DISC2] 01. The Mighty SB / 02. Ghouls and the Goblins 03. Widow / 04. Johnny Swing / 05. Good Friend 06. Untitled

Jimmy Johnson (b) / Toss Panos (dr) Ronald Bruner Jr. (dr) / Gary Novak (dr) / Scott Kinsey (k) Chris Roy (b) / Chuck Kanooras (slide guitar)

2006/11/11 Release

VME VGDWNF-0010 ¥3,150 (税込)



Eight to Ten Plus

岩波邦江

コツコツと地道に勉強してCD完成の運びとなった内容は、ベタベタした作り物の色気等ではなく、凛とした、たまたすまいの中に、テラとのぞく好い女の恥じらいに、見えかかれする可愛さ——。聴いた後の清涼感を、皆さんも共感していただけたらと思う。 —マーサ三宅

01. I'll never fall in love again 02. The shadow of your smile / 03. Caravan / 04. Girl talk 05. That's all / 06. Bye bye blackbird / 07. The good life 08. I won't dance / 09. It never entered my mind 10. Lullaby of birdland11. My foolish heart

2006/10/1 Release

SOY BEAN BKCK-0810 ¥2,500 (税込)



HUMAN FEELINGS

金丸敏明

幻想空間への旅立ち。やさしくて陽気。時にはハードに! 今放たれるチャップマン・スティックの音世界!

01. IJHATOBU (イーハトーブ) 02. GO FOR IT! (ゴーフォーイット!) 03. SPIRIT (スピリット) 04. DARKNESS (ダークネス) 05. HEART BEAT (鼓動) 06. EDELWEISS (エーデルワイス) 07. NATURE TALES (自然寓話) 08. GOODDOG,HAPPYMAN (グッドドッグ、ハッピーマン) 09. SONG FOR FRIENDS (友へ)

2006/11/3 Release

TONE EARTH TEKT-0001 ¥2,000 (税込)

The live line!

11月の新宿ピットイン 【夜の部】

開場 PM7:30 開演 PM8:00 ¥3,000~(1DRINK付)



11月10日(金) **ラダ カルテット**
水上聡 (Key) 林 栄一 (Sax) 類家心平 (Tp) 上村勝正 (B) 外山明 (Ds) 向山テツ (Ds) 中村 敬 (Vo)

11月11日(土) **板橋文夫 カルテット**
板橋文夫 (P) 林 栄一 (As) 井野信義 (B) 外山明 (Ds)

11月12日(日) **林 栄一 クインテット**
林 栄一 (As) 渡辺隆雄 (Tp) 久保島直樹 (P) 伊藤啓太 (B) 小山彰太 (Ds)

11月13日(月) **片桐和生とジャズブリッジ**
片桐和生(Ds) 立花洋一(P) 山村 隆(B) 片桐智和(As) アケミ(Vo)

11月14日(火) **Andrea Marcelli Trio**
前売 ¥4,500 当日 ¥5,000

Andrea Marcelli (Ds, Cl, Arr) トーマス・クラウザー (P) ジャンルーカ・レンツィ (B)

11月15日(水) **大野俊三・峰 厚介 スペシャル・セッション**
¥3,500

大野俊三 (Tp) 峰 厚介 (Ts) 海野雅成 (P) 杉本智和 (B) 藤井 撰 (Ds)

11月16日(木) **今村祐司 GROUP**
今村祐司 (Per) 松風 鮎一 (Sax) 渋谷 毅 (P,Or) 秋山一将 (G) 上村勝正 (B) 本田珠也 (Ds)

11月17日(金) **高瀬アキ *オーネット コールマン 選集(1958-1968)***
¥3,500

高瀬アキ (P) 林 栄一 (Sax) 井野信義 (B)

11月18日(土) **国府弘子 スペシャル・トリオ** ¥3,000
国府弘子 (P) 八尋洋一 (B) 岩瀬立飛 (Ds)

11月19日(日) **成川修士「さんぼ道」CD 発売記念ライブ**
成川修士 (G) ゲスト: 海道雄高 (B) 安藤正則 (Ds)

11月20日(月) **ALTERED STATES 2DAYS**
20日 ¥3,000 21日 ¥3,500

11月20日(月) **アルタードステイツ meets 高橋悠治**

内橋和久 (G,Effects) ナスノミツル (el-B) 芳垣安洋 (Ds) 高橋悠治 (P,Laptop)

11月21日(火) **plays PINK FLOYD**
内橋和久 (G,Effects) ナスノミツル (el-B) 芳垣安洋 (Ds) 岡本 洋 (Key,P) ゲスト: 久保田亜紀 (Vo) MAX (Vo) 松本 治 ホーンセクション 鬼怒無月 (G) 勝井祐二 (Vn) ほか

11月22日(水) **Minga Senegal Special Night**
早坂紗知 (Sax) 永田利樹 (B) 小畑和彦 (G) 竹中俊二 (G) ワガン・ンジャエ・ローズ, ボガ・ンジャエ・ローズ, ママドゥ・ロー (Per) アブドゥ・バイファル (dance,vo,djembe)

11月23日(木) **Minga Original**
早坂紗知 (Sax) 永田利樹 (B) 新澤健一郎 (P) コスマス・カピツァ, ウィンチェスター・ニー・テテ (Per) ゲスト: 北原雅彦 (Tb) カルメンマキ (Vo)

11月24日(金) **強者達の狂宴**
早坂紗知 (Sax) 永田利樹 (B) コスマス・カピツァ (Per) おおたか静流 (Vo) 程農化 (二胡) Killer Bomb (MPC from Think Tank)

11月25日(土) **Pekka Pykkänen's Tube Factory / 日比谷カタン**
25日 開場 19:00 開演 19:30 26日 開場 18:30 開演 19:00 前売 3500 円 当日 4000 円

11月26日(日) **Pekka Pykkänen's Tube Factory**
ベッカ・ピルカネン (Sax,Fl) サムリ・ミッコネン (P,Key) ラッセ・リントグレン (B,G) アンドレ・スメリウス (Ds)

11月27日(月) **ZEK オーケストラ**
清水くるみ (P) 片山広明 (Tr) 林 栄一 (As) 松本健一 (Bs) 渡辺隆雄 (Tp) 早川岳晴 (B) 本田珠也 (Ds)

11月28日(火) **missing link**
渡辺隆雄 (Tp) 後藤 篤 (Tb) 吉田隆一 (Bs) 中山 秀 (Org,P,G) 早川岳晴 (B) 北澤 薫 (Ds) 関根真理 (Per)

11月29日(水) **秋の夜のミンガス等・・・フィーチャリング デイナ・ハンチャード**
from second: 松本 治 (Tb) 木橋光国 (Tp) 松風 弘一 (Reeds) 津上研太 (As) ユキ・アリマサ (P) 水谷浩章 (B) 高良久美子 (Vib) 芳垣安洋 (Ds) デイナ・ハンチャード (Vo)

11月30日(木) **Miya**
Miya (Fl) マツモニカ (Harmonica) 水谷浩明 (B) 外山明 (Ds)

SHINJUKU PIT INN
〒 160-0022
2-12-4 ACCORD BLDG. B1
Shinjuku shinjuku-ku Tokyo JAPAN
☎ 03-3354-2024
http://www.pit-inn.com

11月21日(火) **plays PINK FLOYD**
内橋和久 (G,Effects) ナスノミツル (el-B) 芳垣安洋 (Ds) 岡本 洋 (Key,P) ゲスト: 久保田亜紀 (Vo) MAX (Vo) 松本 治 ホーンセクション 鬼怒無月 (G) 勝井祐二 (Vn) ほか

11月22日(水) **Minga Senegal Special Night**
早坂紗知 (Sax) 永田利樹 (B) 小畑和彦 (G) 竹中俊二 (G) ワガン・ンジャエ・ローズ, ボガ・ンジャエ・ローズ, ママドゥ・ロー (Per) アブドゥ・バイファル (dance,vo,djembe)

11月23日(木) **Minga Original**
早坂紗知 (Sax) 永田利樹 (B) 新澤健一郎 (P) コスマス・カピツァ, ウィンチェスター・ニー・テテ (Per) ゲスト: 北原雅彦 (Tb) カルメンマキ (Vo)

11月24日(金) **強者達の狂宴**
早坂紗知 (Sax) 永田利樹 (B) コスマス・カピツァ (Per) おおたか静流 (Vo) 程農化 (二胡) Killer Bomb (MPC from Think Tank)

11月25日(土) **Pekka Pykkänen's Tube Factory / 日比谷カタン**
25日 開場 19:00 開演 19:30 26日 開場 18:30 開演 19:00 前売 3500 円 当日 4000 円

11月26日(日) **Pekka Pykkänen's Tube Factory**
ベッカ・ピルカネン (Sax,Fl) サムリ・ミッコネン (P,Key) ラッセ・リントグレン (B,G) アンドレ・スメリウス (Ds)

11月27日(月) **ZEK オーケストラ**
清水くるみ (P) 片山広明 (Tr) 林 栄一 (As) 松本健一 (Bs) 渡辺隆雄 (Tp) 早川岳晴 (B) 本田珠也 (Ds)

11月28日(火) **missing link**
渡辺隆雄 (Tp) 後藤 篤 (Tb) 吉田隆一 (Bs) 中山 秀 (Org,P,G) 早川岳晴 (B) 北澤 薫 (Ds) 関根真理 (Per)

11月29日(水) **秋の夜のミンガス等・・・フィーチャリング デイナ・ハンチャード**
from second: 松本 治 (Tb) 木橋光国 (Tp) 松風 弘一 (Reeds) 津上研太 (As) ユキ・アリマサ (P) 水谷浩章 (B) 高良久美子 (Vib) 芳垣安洋 (Ds) デイナ・ハンチャード (Vo)

11月30日(木) **Miya**
Miya (Fl) マツモニカ (Harmonica) 水谷浩明 (B) 外山明 (Ds)

11月21日(火) **plays PINK FLOYD**
内橋和久 (G,Effects) ナスノミツル (el-B) 芳垣安洋 (Ds) 岡本 洋 (Key,P) ゲスト: 久保田亜紀 (Vo) MAX (Vo) 松本 治 ホーンセクション 鬼怒無月 (G) 勝井祐二 (Vn) ほか

11月22日(水) **Minga Senegal Special Night**
早坂紗知 (Sax) 永田利樹 (B) 小畑和彦 (G) 竹中俊二 (G) ワガン・ンジャエ・ローズ, ボガ・ンジャエ・ローズ, ママドゥ・ロー (Per) アブドゥ・バイファル (dance,vo,djembe)

11月23日(木) **Minga Original**
早坂紗知 (Sax) 永田利樹 (B) 新澤健一郎 (P) コスマス・カピツァ, ウィンチェスター・ニー・テテ (Per) ゲスト: 北原雅彦 (Tb) カルメンマキ (Vo)

11月24日(金) **強者達の狂宴**
早坂紗知 (Sax) 永田利樹 (B) コスマス・カピツァ (Per) おおたか静流 (Vo) 程農化 (二胡) Killer Bomb (MPC from Think Tank)

11月25日(土) **Pekka Pykkänen's Tube Factory / 日比谷カタン**
25日 開場 19:00 開演 19:30 26日 開場 18:30 開演 19:00 前売 3500 円 当日 4000 円

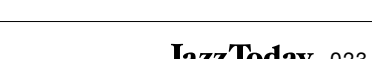
11月26日(日) **Pekka Pykkänen's Tube Factory**
ベッカ・ピルカネン (Sax,Fl) サムリ・ミッコネン (P,Key) ラッセ・リントグレン (B,G) アンドレ・スメリウス (Ds)

11月27日(月) **ZEK オーケストラ**
清水くるみ (P) 片山広明 (Tr) 林 栄一 (As) 松本健一 (Bs) 渡辺隆雄 (Tp) 早川岳晴 (B) 本田珠也 (Ds)

11月28日(火) **missing link**
渡辺隆雄 (Tp) 後藤 篤 (Tb) 吉田隆一 (Bs) 中山 秀 (Org,P,G) 早川岳晴 (B) 北澤 薫 (Ds) 関根真理 (Per)

11月29日(水) **秋の夜のミンガス等・・・フィーチャリング デイナ・ハンチャード**
from second: 松本 治 (Tb) 木橋光国 (Tp) 松風 弘一 (Reeds) 津上研太 (As) ユキ・アリマサ (P) 水谷浩章 (B) 高良久美子 (Vib) 芳垣安洋 (Ds) デイナ・ハンチャード (Vo)

11月30日(木) **Miya**
Miya (Fl) マツモニカ (Harmonica) 水谷浩明 (B) 外山明 (Ds)



INFORMATION

フライド・プライド

Fried Pride Tour 2006 「Cream」

類まれなる歌唱力と表現力を併せ持つハートフルヴォーカリスト **Shiho** と超絶技巧のスーパーギタリスト横田明紀男の2人からなるジャズユニット。2001年、日本人初として、米国の名門ジャズレーベル「コンコード」からデビュー。NY Blue Note でもファンを魅了。Live で披露、絶賛を浴びた日本語楽曲を初収録、Jazz / Rock / Pop というカテゴリーを遥かに超越した「フラブラ」流 POP を完成させた6枚目のニューアルバム「Musiccream」を引っさげ全国ツアーが決定!!



【日時】10月16日(月) 18:30 開場 19:00 開演
【場所】札幌ベニーレーン 24
【主催】FM NORTH WAVE (問) WESS 011-614-9999
【発売所】e+ / びあ (Pコード: 232-129) / ローソン (Lコード: 17931)

【日時】10月23日(月) 18:30 開場 19:00 開演
【場所】BEAT STATION (福岡)
【主催】LOVE FM / BEA (問) BEA 092-712-4221
【発売所】e+ / びあ (Pコード: 231-299) / ローソン (Lコード: 87563)

【日時】10月25日(水) 18:00 開場 19:00 開演
【場所】広島クラブアトロ
【主催】中国放送 (問) 夢番地 (広島) 082-249-3571
【発売所】e+ / びあ (Pコード: 232-791) / ローソン (Lコード: 61696) / テオデオ本店ブレイガイド

【日時】10月26日(木) 27日(金) 18:00 開場 19:00 開演
【場所】心斎橋クラブアトロ (大阪)
【主催】FM 802 (問) ソーゴー大阪 06-6344-3326
【発売所】e+ / びあ (Pコード: 233-870) / ローソン (Lコード: 52676) / CNブレイガイド

【日時】10月29日(日) 17:00 開場 18:00 開演
【場所】名古屋クラブアトロ
【主催】Radio-i / ジェイルハウス (問) ジェイルハウス 052-936-6041
【発売所】e+ / びあ (Pコード: 232-518) / ローソン (Lコード: 45181)

【日時】11月2日(木) 18:00 開場 19:00 開演
【場所】渋谷クラブアトロ (東京)
【主催】ニッポン放送 (問) 渋谷クラブアトロ 03-3477-8750
【発売所】e+ / びあ (Pコード: 233-109) / ローソン (Lコード: 35564)

■一般発売日: 7月23日(日)
■チケット: 自由 ¥5,750 (1ドリンク付・税込・スタンディング・若干数座席有り・整理番号付)
未就学児童入場不可
■発売所: イープラス (e+) <http://eplus.jp/fp/> (パソコン&携帯) 楽曲もお聴き頂けます!
チケットびあ 0570-02-9999 / 0570-02-9966 (要Pコード)
ローソンチケット 0570-084-001 (札幌) / 003 (東京) / 004 (名古屋) / 005 (大阪) / 006 (広島) / 008 (福岡) (全て要Lコード)

特別協賛: 《セゾン》カード
後援: ビクターエンタテインメント
企画制作: ホリプロ / バルコ (クアトロ公演)

公式サイト: <http://www.friedpride.com/>

ロバータ・ガンバリーニ

富士通コンコード・ジャズ・フェスティバル2006

【日時】10月27日(金) 18:00 時開場 18:30 分開演
S席 ¥7,000 A席 ¥6,500
【場所】高崎 高崎市文化会館

【日時】10月29日(日) 前売り ¥7,000
(1部) 15:00 時開場 15:30 分開演
(2部) 16:45 時開場 17:00 分開演
【場所】東京 TUC *

【日時】10月30日(月) 18:00 時開場 18:30 分開演
S席 ¥7,500 A席 ¥6,500 B席 ¥5,500
【場所】札幌 コンサートホール キタラ

【日時】10月31日(火) 18:30 時開場 19:00 分開演
S席 ¥10,000 A席 ¥9,000 B席 ¥8,000
【場所】大阪 厚生年金会館 芸術ホール

【日時】11月01日(水) 18:00 時開場 18:30 分開演
S席 ¥6,000 A席 ¥5,000
【場所】高槻 高槻市現代劇場中ホール

【日時】11月02日(木) 18:30 時開場 19:00 分開演
S席 ¥4,500 A席 ¥4,000 B席 ¥3,000
【場所】高知 夜須中央公民館 マリンホール *

【日時】11月03日(金) テーブルシート ¥15,000
(1部) 15:00 時開場 16:00 分開演
(2部) 19:00 時開場 20:00 分開演
【場所】名古屋 ブルーノート

【日時】11月04日(土) テーブルシート ¥6,000
(1部) 17:00 時開場 18:00 分開演
(2部) 20:00 時開場 20:45 分開演
【場所】名古屋 ブルーノート *

【日時】11月05日(日) 16:00 時開場 17:00 分開演
S席 ¥10,000 A席 ¥9,000 B席 ¥8,000
【場所】東京 簡易保険ホール
(問) オールアート Tel. 3441-1173

【日時】10月28日(土)
【場所】甲府 コットンクラブ *
(問) Tel. 055-233-0008

*ロバータ・ガンバリーニ単独公演

【来日メンバー】
ロバータ・ガンバリーニ (vo)
ジョン・ハモンド (p)
ジム・ヒューアート (b)
ジェイク・ハナ (ds)



SWING-O

遊女ー ASOBI ー SEX SOUL TOKYO ReleaseParty vol.1

【日時】10月26日(木) 18:30 open charge ¥2,500
【場所】@渋谷 PLUG
【出演】千和 chiwa (SoulTribeConnection)、maru、yoshiko、天倉正敬、鈴木渉、瀧美幸裕 他
<http://www.shibuya-plug.tv>

遊女ー ASOBI ー SEX SOUL TOKYO ReleaseParty vol.2

【日時】11月21日(火) 18:30 open / 19:30 start charge ¥3,150
【場所】@渋谷 JZ-Brat
【出演】金子マリ、Keyco、Tsubaki、千和 chiwa (SoulTribeConnection)、maru、yoshiko、天倉正敬、鈴木渉、瀧美幸裕、島裕介、森学 他
<http://www.jzbrat.com/top.html>

ハクエイ・キム

ハクエイ・キム セカンドアルバム発売記念ライブ

【日時】11月1日(水)
1st: Open 18:00 Start 19:30
2nd: Open 21:00 Start 22:00
Music Charge 入れ替え ¥3,150 通し可 ¥5,250 + オーダー
【場所】@渋谷 JZ BRAT
【出演】HAKUEI KIM (p) Jeff Curry (b) Ko Omura (ds)
Guest: 日比野剛彦 (sax) Neil Stalaker (tp) 久保田浩之 (g)

夜ジャズ〜 Jazz Allnighters 〜

IMMIGRANT'S BOSSA BAND 「夜ジャズ」

【日時】11月3日(金)
19:00-5:00 (オールナイト・2部構成・I部からII部へ通し可)
【場所】@渋谷 JZ BRAT (オレンジベコと共演)
【出演】DJ: 須永辰緒 / 敷島 / 西山隆 / PAO
【I部】19:00-23:45 (通し可) ¥4,500 + オーダー
1st LIVE 20:00 Immigrant's Bossa Band
2nd LIVE 22:00 orange pekoe
【II部】24:00-5:00
オールスタンディング ¥3,000 / 1drink (¥2,500 / 1drink with Flyer)
LIVE: Shima&ShikouDUO

アンドレア・マルセリ・トリオ・チャリング・トーマス・クラウセン

ヨーロッパの感性がピアノ・トリオを変える!

ウェイン・ショーターも絶賛したイタリアの俊英ドラマー、アンドレア・マルセリがマイルスとも共演したデンマークの大家ピアニスト、トーマス・クラウセンとのトリオで初来日公演決定!

【メンバー】
アンドレア・マルセリ (ds, cl, 編曲) Andrea Marcelli
トーマス・クラウセン (p) Thomas Clausen
ジャンルーカ・レンツィ (b) Gianluca Renzi

【ツアー・スケジュール】
11月11日(土) 名古屋 DOXY
11月14日(火) 東京 新宿ビットイン
11月15日(水) 静岡・袋井 ライブ&カフェ マムゼル
11月16日(木) 京都 京都府立府民ホール アルティ
11月17日(金) 金沢 もつぎりや

【協賛】
イタリア文化会館 / デンマーク・ジャズ・フェデレーション
【協力】
55 RECORDS

LIVE 情報

【日時】10月24日(火)
open 18:00 start 19:00
¥2000 + order
【場所】名古屋 K.D.Japon
tel:052-251-0324
【出演】佐々木匡史 (ag.vo) / 火足
白井康浩 (g) 小野良子 (as)
ジョンのサン



<http://www2.odn.ne.jp/kdjapon/>

【日時】10月25日(水) open 19:30 start 20:00
前売り ¥2,000 当日 ¥2,500
【場所】古屋七ツ寺共同スタジオ tel:052-221-1318
【出演】七感弥広彰 (舞踏) 南澤靖浩 (シタール) 白井康浩 (g)

【日時】10月26日(木) open 19:30 start 20:00
前売り ¥2,000 当日 ¥2,500
【場所】古屋七ツ寺共同スタジオ tel:052-221-1318
【出演】七感弥広彰 (舞踏) 南澤靖浩 (シタール) 白井康浩 (g)

【日時】10月27日(金) open 19:30 start 20:00 ¥2,000 + drink
【場所】なってるハウス tel:03-3847-2113
【出演】河合拓始 (pf) 松本健一 (ts) 白井康浩 (g) 鈴木茂流 (永久持続音)
<http://members.jcom.home.ne.jp/knuttelhouse/>

【日時】11月03日(金) open 16:00 start 17:00
【場所】京都造形芸術大学 学園祭
【出演】渋谷知らズオーケストラ

【日時】11月15日(水) open 18:00 start 19:00 ¥4,800 + drink
【場所】渋谷 O-EAST tel:03-5458-4681
【出演】渋谷知らズオーケストラ
<http://www.shibuya-o.com/>

【日時】11月16日(木) open 18:00 start 19:00
前売り ¥4,800 当日 ¥5,300 + drink
【場所】大阪 BICCAT
【出演】渋谷知らズオーケストラ
<http://www.arm-live.com/bigcat/>

【日時】11月17日(金) start 20:00 ¥1,000 + drink
【場所】高円寺 GOODMAN
【出演】白井康浩 (g) 鈴木茂流 (永久持続音)
<http://apaches.hp.infoseek.co.jp/goodman/>

【日時】11月24日(金)
【場所】池袋 ROSA tel:03-5956-3463
【出演】渋谷知らズオーケストラ
<http://www.live-inn-rosa.com/>

歩行の思考、 目玉の記憶。

血中ニコチン濃縮。

text by JT



我輩は JT である。けれどもタバコはもう吸わない。喫煙をやめてからは手持ち無沙汰といふよりも（こんなに時間が余るものなのか…）と十代以降の服に費やしてきた時間の総計に思い至っては呆れ、呆れ果ててもさらに時間が余るので大好きな読書の量は加速し、それでもまだ日が暮れないので盆明けから突如として日課にウォーキングを組み込んだ。となれば生来の極端な性格がたちまち顔を覗かせて、無謀にも初日からノルマ 10Km の河川敷ウォークを始めたのだが、その体調回復効果は絶大で——七夕以降の絶煙効果と相まって開始一ヶ月を待たずして早 5Kg 減のシェイプアップ数値が計測され、この半年間で何本か購入したワンサイズ増ジーンズがいずれも「なんだよ、ぶかぶか履けないじゃん…」といふ万国の悩める肥満症候女性軍からは羨望の眼差しを一身に浴びるような「健康、まっしぐら！」状態にある。

だが、しかし、はたして「健全な精神は健康なカラダに宿る」かどうかは歩行耽溺の日々を重ねるにつれてむしろ疑わしく、みるみる日焼けしてゆく肌ばかりが妖しくも黒光りしている今日この頃である。それでも連日、市川べりの往路を JR 常磐線の鉄橋まで歩いては寅さん記念館を横目で眺めながらの復路を出発点まで制覇するといふ 10Km の行軍は楽しく、なんらの義務感や強制感はない。

しかも元より凝り性の JT であるから、小雨の昼間も闇夜の道程も「いささか愚行の趣き」さえ帯びてきたといふ関係者の指摘はあるものの、そんな苦言がわがヤル気の行進を引き止めるには至らず。しかしながらお天道様はよく観ているもので、明日は九月の暦をめくるといふ午後の日差しを SINCE 1919「Champion」のロゴ入りキャップで避けながら、いつもどおりの進軍を慣行していたら、急に「悲しいほどお天気」といふユーミンの曲で描かれた曖昧模範な感情に侵蝕されて、想定外のその途上暗転以来、歩行のリズムと思考の歩幅、心の鼓動と希望の進路ができそこないのポリリズム然として思わぬ亀裂現象を巻き起こし、一度バランスを崩しかけた感情の譜面は見た目の変わらぬ歩行速度とは裏腹に、脳内でいっそうの乱調をきたしては枝毛のように収拾がつかなくなって、盛夏のウォーキング開始以来初の「引き返し」や「距離の縮小」を耳底で囁いてきたりもしたのだが、鬱鬱とたちまち暗雲が垂れ込めてゆく冬の旅空の如く変容し、わが脳髄はまだ「不測の事態」を咀嚼しかねて千鳥足状態の迷走をやめず、眼下で歩みを止めない二本の足ばかりが「我ガ事ニ非ズ」とばかりにノルマの距離を稼いでゆ

くのだった…。

禁煙の初期段階ではやや鬱気味になるらしい、というのと、スポーツ依存症はむしろ心への逆効果を生む、といふ俗説や通説はたぶん痛切な真理（心理）なのではないかと思いつつも、朝陽がのぼればカラダが筋肉から目覚めては窓を開け放ち、じぶんの生まれ育った東京方面から流れてくる薫風を吸い込めばもはや一点の躊躇の想いもなく、兵隊の位でいえばかなり下流の一等兵よろしく進軍ラッパの音も鳴らないのに水筒を濾過水で満タンにし、ウォーキングの羅針盤とでも呼べる万歩計のカウントをゼロにリセットし、洗濯バサミから洗い立てのソックスを外しては靴紐を締めている。そのじつ、本当はややシマリスクン似の胸中では今日も昨日と同じ“陰り”に襲われたらどうしよう…お天道様はいじめ、いじめない？）とかなんとか幾ぶん小心者のつぶやきを吐きながら、レントゲン写真に映る四つ葉状の雲影的な想念が脳裡を掠めている。

けれどもドアを開けていつものトラック街道を横断し、サイクリング・ロードへの石段を駆け上がる頃には五〇を過ぎて男の



Johnny's Greatest Hits



time for a witness
the feelies



北京の秋
清水靖晃



イン・ザ・ビギニング
(ライヴ・アンソロジー 1977-81)
ザ・スリッツ



慕情
菅野邦彦



子。一抹の不安をマイナス値までふり払い、今日も今日とて金町方面への往路上にコマを進め、自ら定めた健康へのノルマをクリアすべく残暑下の行軍を始めるのであった。が、生半可なダイエット宣言で理想の減量効果が得られるはずもないと同様、カラダを鍛えれば心のシミも霧散するなんていふほど人間の精神はやわでも単細胞でもなく、まだ1Kmも歩まぬうちから昨日に輪をかけたような「悲しいほどお天気」な心模様でChampion キャップで覆った頭蓋骨がたちまち侵されて、じぶんでもかなり意外な「コース変更宣言」が白旗とともに脳裡の掲揚場で掲げられ、気がつけば唯一元気な(それとも、どこか、カラ元気か?) 人体部位である両脚は本日初めて折れる「野菊の墓記念館」への石段を降りているのであった。

要は日課散歩のスタート以来、これが初めての勇気ある撤退を自らに言い渡したはずのだが、未練派の一面が顔を出し、件の石段を降り切ってもまだ、「道を折れるとは…あまりにも今のじぶんを象徴しすぎではないか!? 本当にそれでオマエはいいのか…」なんぞといふ軽度分裂症患者特有の(かどうかは知らないけれども) 牛の胃袋的な反芻思考が脳内で蠢いて、それでも鬱鬱と撤退を進める平成の山頭火にもなれない「どうしようもないわたし」は戻るにも戻れず、ジャスト対岸に位置する名所の柴又帝釈天には生涯(?) 及ばぬものの「矢切の渡し」で昔から全国的に知られているといふ歴史的価値では負けていない矢切駅までなんとか漕ぎつけては駅前前のマツモトキヨシでα-Lリポ酸(100mg)+L-カルニチン(300mg)+CoQ10(60mg)の三種が合理的に含有された某ライヴハウス店

主推奨の健康食品を初購入して、半べそ模様の小雨がパラついてきた帰路を「駄目な僕」の無頼庵雨入村へと急ぐのだった…。

さて、そうやって昨今のじぶんの不調さをボヤいたり、友や風にも聞いても一向に答えの出ない紙面活性化の悩みを抱えながら電子の筆を進めている間にも、仕事場のモニター画面上ではオーネット・コールマン・トリオ(デヴィッド、モフェット、オーネット)による映画『Who's Crazy?』(1966年)のためのサントラ録音をめぐる制作者との丁々発止ぶりがリプレイで何度も流れ、次いで2 in 1のもう一作の貴重映像、ローランド・カーク&ジョン・ケージの『サウンド??』がくり返されて映し出されている。この2作の内容自体はサンプル盤が到着した直後に仰天しながら固唾を呑んで鑑賞済みではあるものの、こうして執筆の合間にチラチラと横目で拾い見しているだけでも各シーンの一コマコマから妙な活力をもらえるから、不思議なDVDである。

その活力の源や成分はたぶん、音の冒険者たちが「決して闘いをやめない」不屈の精神性であったり、「妥協を許さない」表現へのこだわりであったり、闘う同志の間にも「不断に流れる緊張感」や繊細なやりとりであったり、言葉では追いつけない「純粋な表現水脈」の記録を追体験できるコトへの喜びであったり、こんな仰天映像が「忽然と掘り起こされる」アーカイブスな時代への率直な敬意であったり…するのだが正直、じぶんを例にとっても本DVDの発売と奇しくも相前後してようやく同時購入したジョン・リトワイ



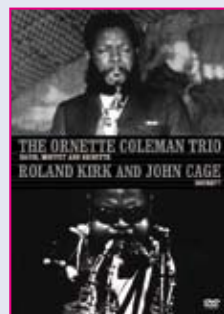
ラー著『オーネット・コールマン〜ジャズを変えた男』(ファラオ企画刊)も、ジョン・クルース著『ローランド・カーク伝』(河出書房新社刊)も読する時間は当分ないだろう。少なくとも正月休みまでは冒頭の1ページさえ捲れる機会はないと思うし、おそらく来年の今頃になっても未読状態は変わっていないかもしれない。ジャズの関連本といわず、巨星陣の自伝や評伝本に限っても、そうやって先送りにされている書籍は何冊も埃をかぶり、相変わらず“ながら聴き”の可能なCD音源のみの体験やi-Pod鑑賞でジャズをめぐるあれこれを思考したり、彼らの業績を手探りする行為を続けている、じぶんのような人間にとっては短時間で濃密な音楽的追体験が可能なこのテのDVD発売は願ってもない朗報なのだが(もちろん活字の可能性と「ならでは」の味読体験の意義は重々承知の上で)近年、この映像作品ほど引き込まれた音楽ソフトも珍しい。

いや、決して発売元(ナウオンメディア)にお世辞を云うわけではないけれども、以前に本誌でも掲載した『エルヴィン・ジョーンズ: ディファレント・ドラマー』&『ジャッキー・バイアード: エニシング・フォー・ジャズ』の2 in 1 DVDもとても面白かった。とりわけ(動く生身のバイアードって、こんな感じだったんだあ…)と思わず目からウロコ状態で堪能した後者の稀少性はもっとも、アナウンスされて然るべきだろう。最近嬉しいコトに廉価傾向が促進され、次から次へと話題作の登場が目白押し状況にある音楽DVDの世



© David, Moffett and Ornette: The Ornette Coleman Trio 1966
© SOUND?? Raahsaan Roland Kirk and John Cage 1967

界。ただ、1本単位の値段は下がっても「あれも買いたい、これも買いたい」の物欲リストはどんどん増えていき、気がつけば「いつか、きっと…」の買い逃し重要作品が店頭から姿を消しているなんてコトも珍しくない。後悔先に立たずの泣きを見る前に貴兄がもしJazzTodayの愛読者ならばこの4作、いや、2 in 1だから2本のこのお買い得盤だけは絶対、明日にでも入手すべきである。損はしない、間違いないと、JTが保証する。



「オーネット・コールマン・トリオ: デヴィッド、モフェット、オーネット」&「ローランド・カーク&ジョン・ケージ: サウンド??」

David, Moffett and Ornette: The Ornette Coleman Trio, SOUND?? Raahsaan Roland Kirk and John Cage

フリー・ジャズの創始者オーネット・コールマンと、伝説のサクソフナーローランド・カーク。インプロヴィゼーションの歴史に名を残す偉大な2人のドキュメンタリーを2 in 1でリリース!

収録曲

「オーネット・コールマン・トリオ: デヴィッド、モフェット、オーネット」
01. Sadness / 02. European Echoes

「ローランド・カーク&ジョン・ケージ: サウンド??」

01. 3 in 1 without Oil / 02. Here Comes The Whistlerman / 03. You Did It You Did It
03. A Nightingale Sang in Berkeley Square

出演:

「オーネット・コールマン・トリオ: デヴィッド、モフェット、オーネット」
オーネット・コールマン(アルトサクソフナー)、デヴィッド・アイゼンソン(ベース)、チャールズ・モフェット(パーカッション)

「ローランド・カーク&ジョン・ケージ: サウンド??」

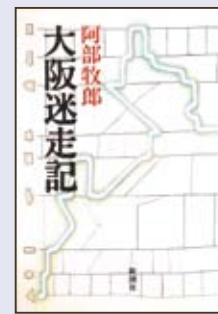
ローランド・カーク(テナー・サクソフナー)、ジョン・ケージ、デヴィッド・チュードア

<http://www.nowondvd.net/products/coleman/>

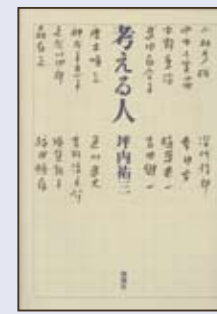
ナウオンメディア
NOOD-00069 ¥3,990(税込)
2006/9/22 Release



嵐山光三郎著
『昭和の出版残侠伝』
(筑摩書房)



阿部牧郎著
『大阪迷走記』
(新潮社)



坪内祐三著
『考える人』
(新潮社)



森永博志著
『ドロップアウトのえらいひと』東京書籍



岡崎武志著
『気まぐれ古書店紀行 1998→2005』(工作社)



『サン・ソレイユ』から。



『ラ・ジュテ』から。

次もそんな推奨 DVD 作品の流れ上といふか、これはもしかしたらじぶんが再鑑賞するコトによって近ごろ少々鬱気味な心象の汚れを洗い流してくれ、日々悩みを深める「今後の紙面構成」といふ本誌の課題にも思わぬヒントを与えてくれる作品かもしれないし、何か拭い去りたいものを抱えている同胞にもぜひ観てもらいたい秀作なので紹介しておこう。と云ってもリリースの時期からすれば決して新作ではない。それでも今回紹介したかった個人的経緯と理由は次のようなものである。

件の DVD ソフトは、クリス・マルケル監督の映画『ラ・ジュテ / サン・ソレイユ』の 2 in 1。じつは JT、数年前の BS 衛星劇場でこの未見の 2 作が OA されるコトを何かの記事で読んで「これは相当面白そうだし、じぶん好みの作品に違いない!」と目星をつけて鑑賞と同時に VHS 録画もし、重ね録りしたラベルにその場で記入を怠ったためにやがて何処かへ紛れたまんま…以来「検索対象リスト」の筆頭作、再会希望映画の第一位を占めてきた作品なのだが、BS 衛星劇場で OA された時も 2 in 1 の構成。とりわけ後半で放映された「記憶をめぐる」紀行映像的なマルセル作品があまりにも素晴らしく、ゆえに鑑賞後の感動の定義づけも監督やフィルモグラフィの検索もすぐには行なう気もわかず（音楽であれ映像であれ文学であれ、本当に心動かされた稀少作と邂逅した際の昂ぶりとはそういうものだろう）、メモを取ったわけでもなかったもので以来、監督名も肝心のタイトルさえも失念してしまって今日まで来た次第。ところが先日、その消息不明 / タイトル失念作の正体が判明したのは、今夏購入の VHS/DVD ダビング専用機でサクサクと移植作業を進めるうち、「あった! そうか、このテープに重ね録りしていたわけかあ!」と念願の再会を果たせたためである。

ゆえに検索も一発でヒットし、同 2 in 1 作品がアップリンクから DVD 化されている事実も判明した。前述の経緯上、じぶんは BS 放映時のダビング版を DVD-R で保存できたが、やはり画質の良いパッケージ商品で今度は購入するつもりでいる。では、これほどまでに長い前説を綴ってじぶんが紹介したかった、その映像作品の内容自体はどんなものなのか。焦らすわけではないが、これも再び迂回するような書き方で話を進める JT 流儀をお許し願いたい。

たとえば、アナタは数多あるヴィム・ヴェンダース監督の作品中、『東京画』や『都市とモードのビデオノート』といふ日本が舞台の 2 作をどう評価しているだろうか。いや、評価なんぞといふ大袈裟なスタンスでなくて構わない、好きか嫌いかどうかでもいいか、いずれかのタイプであればこの『サン・ソレイユ』はわざわざ購入してまで観る必要もないだろうと思う——そうそう、ここで断わりを付記しておけば、同 2 in 1 の前半に収録されている SF 作品『ラ・ジュテ』に関しては本稿の趣旨から外れる内容なのでこの先でも敢えて触れないし、触れないといふコトが同作への評価をいささかも意味しない——あるいはこの文章をお読みの貴兄、長期ロケによる実



UPLINK ULD-135
¥5,880 (税込)
NOW ON SALE

ラ・ジュテ/サン・ソレイユ

ヌーヴェル・ヴァーグが生み出した才能、クリス・マルケルの代表的 2 作品が登場!!!

「12 モンキーズ」の原案としても知られる、スチール写真のみで構築された異色 SF 作品! 1963 年ジャン・ヴィゴ賞、トリエステ SF 映画祭金賞作

1962 年 / フランス / 29 分 / ヴィスタ / モノクロ / モノラル
監督・脚本: クリス・マルケル
編集: ジャン・ラヴェル
朗読: ジャン・ネグロニ
音楽: トレヴァー・ダンカン
美術: ジョン=ビエール・シュドル
出演: エレーヌ・シャトラン、ダヴォス・ハニッチ

録傑作映画『WATARIDORI』を観たコトがおありだろうか。観た結果、忘れ難い一本になった、機会があればもう一度観てもいい、観ていない人に勧めたい作品である、等の好意的印象を抱いている方ならばぜひ、この『サン・ソレイユ』は自腹を切っても購入して、心地よい孤独の時間を満喫できる晩秋の宵、グラスでも傾けながら自宅の画面で鑑賞なさるコトをお薦めしたい。

ヌーヴェル・ヴァーグに詳しい向きにはマルセル監督の説明も不要だろう。じぶんはこの作品に出遭うまで「こんな才能」が存在するコトも知らなかったし、今回のネット検索で調べるまで「シネマ・ヴァリエテ派の代表監督」であるコトも、アノ『ベトナムから遠く離れて』の製作者である事実も全然気づかなかった。で、肝心の『サン・ソレイユ』（1982 年作品）の内容であるが、ここまで引っ張って随分だけでも何も明かしたくはない。理由の一つは今日のネット全盛時代、映画の内容をつらつらと紙面上で再現記述するといふ行使用いに疑問を覚えるし、好奇心をくすぐられた方の触手は放っておいてもキーボードを打っているであろうから。

理由の二つめは、これぞ「体験する」目玉の冒険的映画の秀作だと思えるからである。決して「種明し御法度」といふ類いの作品ではないし、これを機会にどこがどう優れており、何がそれほどじぶんの琴線を震わせるのかを言葉に換えてみるコトもさほど難儀な作業ではないかと思う。が、有り体な言い方だが「観て、感じて、挿んで」ほしいのだ。一つだけ記しておけば——この紀行映像内ではアフリカと日本の断片的光景が絶妙にミックスされており、意外にも新鮮な印象を受けるのは撮影当時の後者の“かたち”のほうである。

そうそう、それで思い出したが先日、作・編曲家中島ノブユキと ewe の高見一樹両氏と青山の Bar で呑む機会があって、おそらく『野生の思考』に関する話題の流れからヘルツォーク監督の南米原住民を描いた作品の話になって、酩酊気味のトリオは誰もタイトルを想い出せず、「つい数年前に観たはずなんだけど…あれはいつたいどこで眼にしたんだっけなあ…」と 3 人とも異口同音の失念状



Ub-X
橋本一子/ub-x



野生の思考
菊地成孔とベベ・トルメン
ト・アスカラール



エテバルマ-夏の印象-
中島ノブユキ

サン・ソレイユな CD

態で別れたが、翌朝になってじぶんは「ああ…」と思いついた。なんのコトはない、前夜の酩酊トリオが健忘しつつも話題にしていた作品は『10 ミニッツ・オールダー: 人生のメビウス』中の一編、〈失われた 1 万年〉のコトを指していたのだ。で、秀作揃いのオムニバス映画『人生のメビウス』&『アイデアの森』のなかでアノ、ヘルツォーク作品が最も印象ぶかいという方ならばもう『サン・ソレイユ』を買うしかない!

そして最後にこれだけは明言しておくが、創刊以来何かと紆余曲折の誌面構成をくり返してきた JT だが(といふほど傍目には刷新されているようには見えないといふコトのほうが問題かもしれないが…)、「良い音楽を伝える」といふためにはどうしたらいいのか——そのヒントこそがこの映像作品に対する羨望感のなかに秘められているような気がしてならないのだ。映画のように、あの頃みたい

Jazz Today[®]

発行人: 鯉沼利成 jazz today 31号
 編集人: 末次安里 表紙画: タジマヤスタカ
 デザイン: Factory Jam (岡本義憲&三村洋一)

制作: jazz today プロジェクト
 〒107-0062 東京都港区南青山3-4-7-402
 専用電話: 03-3746-8760 e-mail: sue@image.ocn.ne.jp

ブログ版 編集長日誌 公開中! <http://blog.goo.ne.jp/jazztoday/>



© NAMI OGATA

Jazz of LIFE

シカゴと夜と音楽と
連載 vol.7

玉手箱なジャズ

text by 尾形奈美

■ 尾形奈美 宮城県仙台出身。写真家。2002年 Chicago Jazz Festival に連動して HotHouse Picture Jazz 展に招待出品以来、シカゴを中心に活動してきた。03年、米国の写真雑誌「Photo Review」の国際写真コンテストにて第3位を受賞。今年2月仙台にて初の個展。

シカゴのサウスサイドに行くと、小さなジャズのライブやイベントが結構あって、気軽に飛び入り演奏をさせてくれる。ふつうはバンドのメンバーと友だちだとか、プロでの演奏経験があるとか、何らかの技術保障がないと演奏させてくれなそうなものなのだが、大概は自己申告でOK。バンドの誰かに楽器を弾く（または歌う）と告げただけで「おおそうか、じゃあ何弾く（歌う）か？」と嬉しそうに肩に手をかけてくる。うまいへたが問題にはならない。一緒に演奏すること、若い子であれば、ステージに立つチャンスを提供してあげられること、を楽しんでいるようにも見える。お客のほうも、飛び入りが来たとなるととても盛り上がる。シカゴのレジェンド、Von Freemanのギグなどはその最たるもので、飛び入りがある意味目玉だったりもする。通りがかりのプロだったり、近所のアマチュアだったり…毛糸の帽子を深々とかぶったラッパの小さな男の子が来た、と思ったら、実は Roy Hargrove だった、なんてこともあった。無名のアマチュアだって侮れない。プロ顔まけの熱いステージを見せてくれることもある。もちろん、その分、ヘンテコな歌や演奏にも出くわすのだが。それはそれで面白い。だから、開けてビックリ玉手箱、ってなわけだ。

“シカゴのサウスサイド” と言えば、ふつう、

“危険な黒人街” の代名詞のように使われるのが一般的である。銃声は日常茶飯事で、昼間にクラブの看板写真を撮ろうと車を降りただけで、即座にパトカーが寄ってきたこともあった。しかし、このほかジャズに関して、シカゴのサウスサイドのこういった器の大きさは半端じゃない。「シカゴのサウスサイドは、ニューオリンズからやってきたミュージシャンたちが、切磋琢磨でジャズを花開かせた場所で、その後NYへとジャズは飛び火した。だからシカゴはジャズ史の中でも重要な役目を果たしている」そんな説明を、私は写真展のたびに何度となくしてきた。が、何よりも名声を求めてNYに行かなかったミュージシャンたちや、ジャズがジャズに育っていく過程をリアルタイムで見てきた人々（今はじいちゃん、ばあちゃんだが）、まだ沢山ご存命でいるわけだから、むしろジャズは何か起きなきゃ楽しくない、ギャンブル的な雰囲気サウスサイドには残っているのだなあ実感する。

写真は飛び入りで出会ったシンガーの Julia。歌唱力もさることながら、スクヤットで遊んでみたり、ベースと掛け合いをしてみたり、バックバンドを手で統制しながら、お客を飽きさせずに一曲を何十分と歌い続ける彼女の演出力には脱帽の一言だった。

<http://www.chicagojazzphotos.com>